

群

峰

3

二〇一七年三月  
富山文学の会

# 群峰 3

## 富山文学の会

### 目次

◇富山文学の会第7回研究大会

八木光昭先生講演抄録

46

### ◇研究論文

◇文学散歩 報告

「高志の国文学館周辺の文学散歩」

53

黒崎 真美  
横山源之助と郷土の人々

1

◇二〇一六年度 活動記録

61

今村 郁夫

原典の書き込みから見る小泉八雲  
「常識」——ヘルン文庫調査から——

11

金山 克哉

北方の冬 高島高論

17

近藤 周吾

坂口安吾と富山

29

小谷 瑛輔

〈子どもたちの時間〉の現代  
——山内マリコ論序説

37

# 横山源之助と郷土の人々

黒崎 真美

## 1、魚津町

左官職人の息子として育てられた横山源之助が、弁護士を目指し、社会の弱者の姿を世の中に問う文学者となったのは、魚津という町の気質や関わってきた人々が大きく影響を与えたと考えられる。

魚津町の人々の気質を象徴的に表すものの一つは、たびたび起きた米を巡る騒動への対応ではないだろうか。

魚津町から全国的に広がった米を巡る騒動として、一八八年のいわゆる「米騒動」が注目されるが、明治期にも富山県下では何度となく発生していた。『高岡新報』（注1）の記者井上江花は米価に関する記事をたびたび書いていたが、一八六九年十月に塚越村で起きた「ばんどり騒動」について、

明治二年の十月、加賀藩知事の治下に属せる、越中国新川郡に蜂起せし、農民一揆の大騒動は、世に是れを『塚越のばんどり騒動』又は『忠次郎一揆』とも称へて、今に猶其凄まじかりし光景を記憶せる古老稀れなりとせざるも惜しい哉未だ其顛末を叙して一篇の文章としたるものに接せず。思ふに此重大の出来事は越中国農史の上に、将また社会史の上に観過すべからざるのみならず、社会問題の勃興せんとする情勢ある、今日是れが調査の必要を痛感せしを以て、世は之れが材料の蒐集に手を着くることとし、杖を中新川郡内に曳けり。『江花叢書第十一巻 塚越ばんどり騒動』一九三三・三

と記している。他にも農民を中心とした年貢の減額を迫る騒動が一八六九年から一八七〇年にかけて起きているが、

江花はその中でも塚越の騒動が「社会問題の勃興」として特に注目に値すると考え、騒動から三十五年後の一九〇四年一月頃から三月十四日にかけて、『高岡新報 夕刊』に四十五回連載で詳細を紹介した（注2）。

『北国新聞』の創設者赤羽万次郎に誘われて一八九七年に臨時記者になった江花は、その紹介で権藤震二と出会う。権藤はもともと『毎日新聞』の記者であり、一八九四年に源之助が毎日新聞社に入社した時に在職していた。権藤は「社会問題に目を付けなければ」（注3）いけないと江花に話していたというし、江花自身も「救貧事業の活動を調べ」（同前）ており、社会問題に対する関心が権藤を介して江花と源之助を結びつけたのであろう。江花は「私の借家史（一）」（『江花叢書第一巻』一九二六・四）に、「天涯茫茫の横山源之助君だのが遊びに来た」と記している。江花の妻みさをの日記（注4）にも、一九〇〇年の八月から十一月にかけて、源之助が江花宅をたびたび訪れたことが記されている。一八九九年六月から療養のために魚津に帰郷していた源之助は、その間にも魚津取材した記事を中央の雑誌や新聞に載せたり、地元紙の記事を執筆したりしている。新聞記者であった江花が、同郷の源之助との交流に刺激されたであろうことは容易に推測でき、この交流が「塚越ばんどり騒動」を書くきっかけの一つになったとも考えられよう。

富山県警資料「富山県下における米に関する紛擾沿革一覽票」（注5）の一八七五年の記録に、「浜辺に至り輸出せむとする米倉庫に押寄せ、その結果「警察官吏の命に従ひ解散し、戸長役場の救助にて止む」とある。この騒動が「戸出騒動」として『朝野新聞』（一八八七・二・十四）に掲載され、富山の米を巡る騒動が「初めて全国紙のニュースになった」（注6）という。

富山県警察資料には、一八八〇年に魚津町で起きた紛擾について、「町有志と謀り救助の途を講せしに依り鎮静せ

り」と記されている。これらの「救助」を行ったのは魚津町の富裕層の大梅寺屋（寺崎家）や四十物屋（山澤家）等であった。

山澤家の記録によれば、一八六九年七月二十八日に「夏以来諸物価まれなる高騰」（注7）のために「一〇七五貫文余施与す」（同前）とあり、また「他に寺崎与助五十五石二斗五升、大梅寺屋与次右衛門一五五七貫文」（同前）を寄付したことが記されている。この他にも学校への献金や、火災罹災や軍人家族などへの寄付を多数行っていたという記録も残っている。源之助は、「実業界に根を張れる貸金業者の大勢力」（『実業界』一九一〇・一〇）の中で、「魚津町の山沢長九郎（魚津銀行頭取）の如き、福岡町の石沢太平、保前次郎兵衛の如き、皆な米穀商で肥料商を兼ねてゐるもの、富豪界の顔振ではないが、米産地たる中越地方の実情を徴する好個の材料である」と記しており、山澤家を金融業で財を成した富豪のようなものと考えていた。また、寺崎家（注8）や源之助が徒弟をしていた澤田家も、魚津町の苦境においては頻繁に寄付を行っていた。このような町の富裕層の有力者たちは一八七七年十二月に「魚津聯合会」を創設して会議を開いた。『魚津町誌』（注9）には、「明治十二年十一月、魚津町三拾ヶ町聯合会を開き、魚津町明理小学校階上に於て、管轄内共同の事業に付、協議決定せり、之を魚津町会の嚆矢となす」と記され、会議は翌年一月八日から七日間開かれたという。この会議の第四号議案には「魚津町古来共有宿用金蓄積並仕払方法の事」、第六号議案には「貧民救助の事」が挙げられ、貧民の救済や非常時の備蓄について取り決めを行っている。残念ながらこの取り決めでは貧民の生活を救済するには十分ではなく、その後の騒動を防ぐことができなかったが、社会的弱者のために法整備を行おうとする魚津の有力者たちの試みは、魚津の人々に弱者救済の思想を植え付けることになったのではないか。このような町の気質は、源之助の根底に

「弱者救済」の芽を植え付けることになったのではないか。

注1 一八九二年四月二十日創刊

注2 富山県立図書館では、「高岡新報 夕刊」の一九〇五年二月七日以前の紙面の複数が欠号のため、「塚越ぼんどり騒動」を掲載した可能性のある一九〇四年十二月から翌年一月、二月七日までは未確認。二月九日の第三十一回以降、三月十四日の第四十五回までは日を空けながら連載している。

注3 河田稔『ある新聞人の生涯』一九八五・七 新興出版社

注4 日記「宮のほとり」（『江花文集』第貳巻一九一一）には、八月九日の「横山源之助様夫不在中見ゆ」という記述以降、十四日・十七日・十八日・二十四日、十月七日・八日・十一日・十四日・十六日・二十一日・二十八日、十一月一日・三日に源之助の訪問が記録され、短期間に頻繁に江花宅を訪れたことがわかる。

注5 立花雄一『隠蔽された女米騒動の真相 警察資料・現地検証から見る』（二〇一四・七 日本経済評論社）に収録された「付・警察資料」内の「所謂『越中米騒動』二閱スル記録」資料（二）——（一九三六年十月編纂 富山県特高課）

注6 金沢敏子・向井嘉之・阿部不二子・瀬谷實『米騒動とジャーナリズム 大正の米騒動から百年』二〇一六・八 梧桐書院

注7 紙谷信雄「山澤長九郎家事績年表作成について」（『魚津史談』二〇一五・三）、山澤家資料「四十物屋（山澤）の歴史——市兵衛、長九郎、米太郎——」

注8 寺崎家資料「大梅寺屋（寺崎）の歴史——橘蔵、与次右衛門、弥四郎、平兵衛——」には、「安政五年七月二十日米価騰貴となり小前の者ともへの救済として米を施与する」という記述がある。

注9 『魚津町誌』一九一〇・一〇 復刻版一九八二・一 新興出版社

## 2、澤田六郎兵衛

源之助が魚津町字神明町の澤田六郎兵衛方の徒弟になったのは、一八八二年だという。当時、源之助が住んでいた金屋町など八つの町の戸長を澤田六郎兵衛が務めていたことが、澤田家の徒弟になった理由であろうか。確かな記録は残っていないが、この出来事がこの後の源之助の人生を決めたといえよう。

「中興七世」といわれた第七代六郎兵衛は『家憲』（一九〇六・九 尾澤屋報徳社）を作成し、家族や親族に配布したという。第七十七条まである『家憲』の第壹章「家憲綱要」には、

第一條 皇室を尊敬し神仏を信仰すること

第二條 祖宗父母の鴻思を忘れざる事

第三條 朝政を誹議せず国法を守るべき事

第四條 社会国家の為には応分の義務を尽すべきこと

第五條 尾澤屋報徳社を改善して模範報徳会と為し大に社会に貢献する様心懸べき事

第六條 法厳院崇祖誠明居士の精神を確守し至誠尊祖

質朴節儉剛毅の美風を発揮する事

第七條 単木は折れ易く林木は折れ難し兄弟一致互に私を去り義を重んじ家運ノ隆盛を図るべきこと

と記され、第四條・五條の「社会国家の為の応分の義務を尽くす」や「社会に貢献する」という文面からは、自己の利益だけでなく社会を見据えて物事を判断するという澤田家の在り方が示されている。「尾澤屋」とは澤田家の屋号である。

「尾澤屋報徳社」について『魚津町誌』に、

本社は、明治三十七年二月、社長恰も東都に在りて、療病の際、二宮尊徳 道德経済論てふ書物を読みたるが、動機となりて、創立せられしものにして、日露開

戦中は、或は静岡県報徳図書館より、報徳書を取寄せ、或は各地に於ける同主義の組織等を照会しなどして、一意識立の方法に務めしが、々々明治三十九年に至り、戦後国民の指導上、必要なを認め、知名の士の賛同を得て、小戸浦報徳会を組織せり、時は即ち三十九年二月十五日なりき、然るに爾後主義の実行を謀りしが、余義なき事情に拘束せられ、一時休止せり。

然れども永く放棄すべきにあらねば、同四十年四月に至り、再興を謀り、名つくるに尾澤屋報徳社となし、同月廿三日を以て開会式を挙行す、抑も当社は、遠江国報徳社を本社と仰ぎ、常に指揮監督を受くるものにして、社長には澤田六郎兵衛を推し、二十四名の会員を有し、会員は善種として、毎月拾錢以上の貯金をなすつゝあり、又同主義にかゝる書籍の回覧法を設け、会員相互の向上と、実行とを企図せり、尚ほ将来は堅実なる魚津報徳社を設立し、遂には各村落に及ぼさんとの抱負ありと云ふ、徒らに拡張主義をのみ、念とする勿かれ

と、一九〇七年から「尾澤屋報徳社」を開設したことが記されている。『家憲』に記された「尾澤屋報徳社」が会員を募つて一九〇七年に組織として動き出したということだろうか。「実業界に根を張れる金貨業者の大勢力」（『実業界』一九一〇・一〇）にも、

魚津町郵便局長沢田六郎兵衛は、報徳教ほうとくけうの奨励者、先頃記者に書信を送りて、同地に購買組合興り、商人の間に一種の恐怖を以て迎へられつゝある旨を報じて来た。渠は執れの階級に行はれ初めたるや、詳細を知るに由ないが、余は農民の間に購買組合の興らんことを切に希望する者である。（『横山源之助全集』第五卷）

と、八代六郎兵衛が「報徳教の奨励者」であると記されている。これらの記述から、澤田家が報徳を実践して社会福

社に努めてきた家柄であることは明らかである。源之助は澤田家について、「宿場の社会観察」（注1）の中で次のように書いている。

甲の家あり、今の主人に至る迄八代、旧幕時代の頃は、町年寄を勤めたる家柄にして、且つ今日に於ても旧高二百石許を有し、町内屈指の富豪たり、既に旧家にして富家なるの故を以て、町内の尊敬を受くること甚しく、当主人は町長の職に在り、家は町の「泪又キ」と称せらるゝ場所にあれども、店には僅に醬油を商へるのみにして、深く商業に熱心せず、一に田地の收穫に依りて生活を維持するのみ、而して当主人の長男は、嘗て東京に遊べることありて極めて家の繁昌を望める者、帰来、意を家事に注ぐことなく、日々為すは、なく日を消らし居れり、故を詰れば、なほ勇氣消磨せざるが如しと雖も、一家の経済は事業に手を延ばすの余地なしと称して憮然たり、しかも土蔵には、器具物品山積し、之を金額にするも優に事業を起すを得べし、之を以て責むれば、曰く、若し斯くの如きことあらば、老人（祖父）は、祖先を辱むる者として或は勘当の身となるべしと、因に云、此の地方にては、道具に資産を投ずること甚しく、一家の財産は其半ば之を各種の骨董品諸道具に捐て、而して貧富差等を別つ場合に於ても、亦た土蔵に存する諸道具を計算するを常とす、而して此の地方の習慣として祖先以来蓄積せる諸道具は、一切之を他に放つことをせず、若し斯の如きことあらば、祖先を辱むる者として一家の非難を受くるのみならず、亦た町内一同の攻撃を受く、甲家の長男が或は勘当を受けむと恐るゝもの、蓋し此の故なり、以て地方風俗の一斑を察すべく、地方人士の如何に経済に緩慢なるかを見るべし、或は言ふ者あり、甲家は、偏に田地の收穫によつて生活を求め、店商売なる醬油製造を廃せんとするの計画ありと。『横山源之助全集』

### 第三卷

澤田家は醬油醸造業を営み町内に複数の田地を持つ、魚津屈指の富裕な家柄であるが、それを源之助は「富豪」といい、七代六郎兵衛は町の人々から「尊敬を受」ける人物であると記している。源之助が徒弟になった当時の当主は一八六二年に襲名した第七代澤田六郎兵衛であった。七代六郎兵衛は長年にわたって戸長や町長（注2）を務め、一八八〇年に開かれた聯合議会にも参加している。また俳諧を嗜み、「筆邨」という号で一八八八年に詠んだ俳句「田に驚のかた足たて、時雨たる」（四季混題）が、魚津歴史民俗博物館に所蔵されている。現当主澤田昭英氏によれば、祖父第八代六郎兵衛も芸術に造詣が深く、書画を集め、掛軸の表装や襖の張替えなどは玄人眺だったという。魚津大火（注3）前の土蔵には、美術品の他様々な行事で用いた衣装や道具類がたくさん収蔵されており、徳富蘇峰と交流があったことを示す記録も残っているという。

また、第七代六郎兵衛の長男の長之助は源之助と同年に生まれ、一九〇六年に第八代六郎兵衛を襲名した。源之助と第八代六郎兵衛が忌憚なく話ができる親しい間柄であることもこの記事から読み取れる。一九〇六年九月の『中央公論』に、源之助は次のように書いている。

日新戦役後文学の勃興と共に、一方には毎日新聞、国民新聞、時事新報等に、貧民労働者の記事続出すると共に、小説界にも「社会小説」といふ名称起り、文学社会に社会てふ文学が特殊の意味を作すに至れり。

#### 『横山源之助全集』第九卷

この「社会小説」を描く作家の一人として樋口一葉をあげており、一八九六年一月から一葉宅を訪れたり書簡の往復をしたりしている。同じように社会的弱者に目を向ける同志のような存在として、源之助は一葉を気にかけていた。萩野舎で富裕な家の子女とともに和歌や古典を学んだ一葉

も、澤田家で徒弟をした源之助も、貧富の大きな格差を実感することによって、後にその不公平感をエネルギーにして執筆したのである。数少ない源之助が残した書簡のうち、一葉に宛てた一八九六年八月二十四日附けた葉書は、「越中魚津神明町」（注4）発信である。神明町は澤田家の所在地であり、帰郷した源之助は澤田家に滞在したことが推測される。さらに、年代は不明であるが、第八代六郎兵衛に宛てた「訓点付唐宋八家読本」（注5）の借用依頼の書状からも、その親しさがうかがえ、二代にわたる澤田家との親密な交流が見えてくる。

そして、一八九九年から約一年の間源之助が寄居していたのは、小川山千光寺心蓮坊である。千光寺光学坊の大谷清雅住職によれば、澤田家は光学坊の檀家であるという。千光寺では檀家の子弟を修行のために受け入れる際に、同じ千光寺内の別の坊で修行させる習慣があったという。源之助が療養のために心蓮坊に滞在した理由は、澤田家との関係性が大きかったと考えられる。さらに心蓮坊の畠山寛禅住職は、源之助が滞在した部屋は修行者用の出入り口付近ではなく奥の間であることから、客人待遇であっただろうと述べている。二人の住職の言葉からも源之助と澤田家の密接な繋がりが推測でき、徒弟として澤田家と関係を持って以降、長期にわたって澤田家が源之助の物心ともに後援をしてきたことがわかる。

一八八二年から富山県中学に入学する一八八五年までの、短期間ではあったが濃密な澤田家での時間は、少年源之助の感性を強く刺激しただろう。澤田家所蔵の書籍で学ぶことができ、書画・文学といった芸術に触れることができ、多感な少年期を過ごすには澤田家は絶好の環境だった。腕のいい左官職人の息子として中程度の生活をしていたのである。源之助は、思いがけなく澤田家で富裕な生活を垣間見ることになった。そこには公共事業のために寄付をし、貧民救済のために施与する社会があった。富山県下初の県中

学への進学を期待されるほど優秀な源之助であったから、富裕な社会の一方に貧しい暮らしをする人々の社会があることにも思いを馳せたに違いない。「社会問題」が源之助の眼前に横たわったのである。

注1 横山天涯先生 『太陽』一九〇〇・二二・一

注2 一八九八年四月三十日就任、一九〇二年四月二十九日満期退職。

注3 一九五六年の大火

注4 樋口悦編集『一葉に与えた手紙』一九四三・一 今日の問題社

注5 『或る一つの星の導くもの―横山源之助の業績と生涯―』（一九五六・三 魚津市横山源之助顕彰会 復刻 二〇〇三・二 魚津市教育委員会）には、「明治三十（一八九七）年前後？」と記されている。

### 3、阿波加脩造

阿波加脩造は、一八三五年に高岡の医家八代目佐渡養順の五男として誕生し、十六歳の時に魚津の医家阿波加玄李の養嗣になった。医師として魚津町の内外で活躍したのはもちろんであるが、一八六一年から一八七一年にかけて漢学塾を開いたり、一八七一年に教育訓蒙所の教官、文学訓蒙）となったりして、後進の指導にもあたった。魚津で初めて開校した魚津明理小学校（注1）では約一年の間「副師範心得」として、新川郡町立明理小学校開校時には校長（注2）として小学校教育に関わり、魚津の教育の基盤作りに力を注いだ。また、一八七九年十二月に開かれた「魚津町三十拾ヶ町聯合会」の議長や、一八九四年三月に行われた第三回衆議院議員選挙で野村脩造の名で当選を果たして

国会議員も務めた(注3)。

『魚津町誌』の「善行者人物伝記」には、

資性温良篤実至誠以て事に当り諄々教へて倦まず、常に博愛慈善を行ふを以て自ら樂み、博覽強記百家の書に渉るゝも、謙讓以て人に下り、内には父母に孝養をなし、一家親睦徳犬馬に及ぶ、出でゝは郷党、子弟の指導誘掖を事とし、余力を以て詩藻歌詞を調へ、文墨を弄して自ら遣り、風流自適興味津津たり、時人魚津聖人と尊敬する蓋し故あるなり(中略)先生の徳、医道に、教化に、慈善篤行に、文芸の上に、一新生面を与へられし功、実に著大なり、先生常に門下に語りて曰く、吾記性なく、学識なく、才幹なく、經驗なく、金力なし、而して又曾て行為を以て、法律に触れたることなし、此之無齊の号ある所以なり、但一片報國の赤心は、未だ敢て軽々しく人に譲らず、此れは則ち郷等の後に立ち義務を社会に尽さんと欲して、其勞を辞せざる所なりと、以て先生の素志一斑を窺ふに足る。と記されている。また同郷の黒田源太郎も、「越中国はまだしも、日本國中へ打出してもひけを取らない篤行家であつたと思ふ」(『炉辺夜話』一九三三・一〇)と脩造について記している。

源之助の「地方の青年」(天涯茫茫生『毎日新聞』一八九六・九・一八)には、次のような記述が見られる。

同好談話会と称する青年の一団と町の老先生何某氏との間に戦捷紀念碑文に就いて意見を異にし、青年の方勝利を得たるより遽に渠等青年の勢力も社会の上に認識せられたるものと相聞き候。

老先生某氏といへるは我地坊第一の名望家、何が故に名望あるものなりや事実を詮索せば判然不致候共、先生といへは町一般の者がなし学者なりと認め、道徳家なりと信じ、仰いて之を崇ぶものあれども地に下して先生を論ずる者なく、或はその技倆を疑ふ者あるも

之に同ずる者なく、教育会を起せば氏を会長に戴き、国会議員の競争場裡に立ては党派の甲乙を択はずしてその当選を望み、町民一般の氏を見る殆ど盲目同様、是非の差別を置かずして尊敬致居候処端なく碑文一件に於て氏を以てその文字を改めしむるに及ひ候段我町の上よりいへは近来の珍事。(『横山源之助全集』第一卷)

これは「同好談話会」の青年グループが、町の誰もが異議を唱えなかつた名望家の「某氏」の「戦捷紀念碑文」の文面に反対し、内容を変えさせたことに對する賛辞と、今後も覚悟をもつて社会に関わつてほしいという期待を込めた激励文である。「老先生何某氏」の具体的な名前は記されておらず、源之助のその他の記述にもこれに類するものはないが、この当時の魚津町で「国会議員」になつた教育に熱心な人物は、阿波加脩造の他にはいない。「地方の青年」で話題となつた日清戦争の戦捷紀念碑(注4)は、脩造筆で「國光輝宇宙」と刻されたものが大町幼稚園園庭に残っている。

また、一八六四年に結成された漢詩の社中「清狂吟社」では、その「試業録」を脩造が書き残したという(注5)。「ばんどり騒動」についても数首の漢詩でその様子を描き残している。「己巳十月念九夜觀賊徒過二首」と題した漢詩には、

姦民嘯聚萬余名	炬火如流夜脚輕	敗笠斃蕘形独速
短笈長挺勢縱橫	毀焚催処焦天色	狙獬酣時動地聲
群雞啣喔報殘更	壺漿軍食笑相迎	
席堂寧敢厭民情	炬光東去風猶怒	倉卒縱能容彼暴
隣保相呼空目送	無人不道待官兵	鞋響南東雨未晴

と、騒動を起こした者たちの暴挙が「狙獬」であり、為す術なく「賊徒」に屈する「豪家」の姿を描写している。そして騒動が瞬く間に広がり、官兵に収められてようやく人



々が「安堵」したと、これは「後世」の警めとするために「作歌」したのだと続く(注6)。貧窮した人々のやむにやまれぬ行動を間近で目撃した脩造は、この事件を深く心に刻んだに違いない。

一八八〇年一月に開かれた三拾ヶ町聯合会の第四号議案には、

魚津町共有宿用金原由たるや、往古市街の分限上等の者より多少の金を積号せ根金とし、就中当町限り融通錢札を中分以上の者に差出され、等級に応じ、義務として利子を取立て原金に積置み、又諸營業の内より除金等の方法を設けしものとす、目下好否にか、はらず、該金を中分以上分限者は義務として預け、毎歳元利積算し備置きて、貧民救助、暨凶年等、非常の諸費は、勿論、宿万雑を一時振替、又相嵩むて補助し、或は産物の盛衰に関し、根金拂切に至らんとする時あるも、当時再三適宜を以て繼續し宿用金と称し、来る所の旧法により、即今便宜を加へ、更に蓄積するものは蓄積し、又支弁する方法を設け永續を欲望す。(『魚津町誌』)

とあり、「貧民救助」について議決している。福祉や教育についての協議がなされていたこの連合会には、阿波加脩造の他に澤田六郎兵衛も参加していた。二人は、魚津町の重鎮としてたびたび顔を合わせ、町のために様々な意見交換をしたと考えられる。阿波加脩造の言動や人となり、澤田六郎兵衛から源之助に語られていたとも推測できよう。

医家としての阿波加家の町民からの信頼は絶大であり、一九〇四年から一九〇五年の「軍人遺族患者無料施療者」(『魚津町誌』)を見ると、患者数は阿波加蕃が施療した数が群を抜く。阿波加蕃は脩造の娘婿である。一八五七年に脩造が自宅で開業してから、「貧窮治するの資なきものには、無料施療の途を与ひ、医道仁術の誠意に感泣するもの、其数方を以て数ふ」(『魚津町誌』)という阿波加家もまた、

貧民救済の心が代々受け継がれていた。しかし、横山源之助と阿波加脩造の直接の接点は、一九〇〇年の魚津文庫設立時の発起人に名を連ねていること以外には見られない。「魚津文庫設立趣意書」(注7)に記された発起人は、次の十四名である。

西尾新 大久保興吉 横山源之助 吉澤庄作  
傍田彌三郎 植木伊三郎 谷島喜太郎 松倉嘉之吉 藤井務 阿波加修造 青山松太郎 澤田六郎兵衛 本村松次郎 先名助七郎(『魚津市史資料編』一九八二・三 魚津市役所)  
魚津文庫の設立に際し、源之助は『富山日報』(一九〇〇・五・九、一〇)に有磯漁郎の筆名で「魚津文庫の設立を喜ぶ」を書いており、その最後に、

我国に在りて最も文化に遅くる、中越魚津地方に於て、社会教育普及の一方法として町立図書館の設立を聞き町会は御慶事記念として之を可決したるが如きは寔に喜ぶべきにあらずや、余輩は魚津張議員諸君及び其の発起に尽力せる諸子の労を多とす。

実業家よ、君等は図書館を利用し其の事業に係保する書籍統計に依りて実業家の頭脳を作れ、有志者よ君等は都会より流れ来る演説屋の議論に偏せずして新刊政治書目に依りて時勢の進歩を察よ、青年よ郷等は社会の新勢力たるを忘れず博く智識を求めて二十世紀の青年たる品位見識を作れ、而して一般平民諸君は、実業の余暇を以て読書の快樂を収め国家に在りて忠良の民となり社会に処しては聡明の人たるを期せよ、更に平民諸人に望む、事を起すは易し、唯た之を始めて平民図書館たる実を示すは実に諸子の責任に属す、余輩は其の之を可決せる魚津町会議員に望むと共に深く発起人諸君に実績を挙ぐるに力を尽くされんを望んで已まざる也、魚津の一民として暫く廢したる筆を擲りて此の文を作る。

と記している。客観的に魚津文庫設立に寄せる期待を記しており、この文章からはその内実にあまり関わっていないかっただけではないかと推測される。ちょうど一八九九年から一九〇〇年にかけて心蓮坊に寄宿していた源之助が、恩人である澤田六郎兵衛に誘われて発起人に名を連ねただけなのかもしれない。設立当初の蔵書に、源之助が刊行したばかりの『日本之下層社会』（二八九九・四 教文社）や『内地雑居後之日本』（一八九九・五 労働新聞社）が含まれていないことから、源之助の関わりが低さが感じられる。記録に残る阿波加脩造との直接の接点は魚津文庫設立だけであるが、源之助の社会の底辺に向けた関心は、澤田家で培ったものであるうし、すぐ近くにいた阿波加脩造という偉大な存在の影響を受けなかったとは考えられない。

注1 『魚津町誌』によれば、一八七三年四月に第六学区新川県管内第一中学区魚津一番小学としてつくられたとある。開校にあたり第六学区第九中学区魚津明理小学校に改称された。その後、分割統合を経て、一八八三年に富山県下新川郡町立明理小学校と改称した。さらに小学校令による分割統合を経、一八九二年には魚津町立明理尋常高等小学校を新設、一八九五年に魚津町立尋常高等小学校に改称した。一九四一年に大町国民学校と、一九四七年に富山県下新川郡魚津町立大町小学校と、一九五二年に現在の魚津市立大町小学校と改称した。

注2 一八八三年九月任命、一八八六年一月辞職。

注3 『下新川郡史稿 上巻』（一九〇九・九）に、「二十七年

紀元二五五四 三月、野村脩造、衆議院議員に、七月濱田長次郎、県会議員に当選す」とある。

注4 『魚津町誌』に「校舎の南側に石碑あり、明治二十七八年戦勝記念碑にして、阿波加脩造翁の書にかゝる、國光輝宇宙

の五大金字あり、碑は奇岩堆積の上に建てられ、周らすに桜樹を以てせしは、大和心を表はすの意より出でしなるか、何にしても本町唯一の豊碑なり」と記されている。

注5 寺崎欣次「魚津の漢詩グループ「清狂吟社」あれこれ」『魚津史談』一九七九・三

注6 「十一月二日 賊勢益張 猖獗愈甚 於是官發兵 擊退之」

注7 「御慶事記念魚津文庫設立の旨趣」（『魚津市史 史料編』一九八二・三）

英聖文武なる明治天皇陛下を奉戴し茲に五千余万の日本臣民は空前の慶事に会せり即ち来月上旬を以て行はせらるゝ東宮殿下の御慶事はなり余輩臣民たるものは当に満腔の誠意を表して之れを祝せざるべからず知らず余輩臣民は如何なる方法を取りて祝意を表すべきや料理店に会して酒宴を聞き快を一場に極むるは随分世間に行はるゝ所なれども斯の如きは決して褒むべき事にあらざるは今更言ふまでもなし然らば手段を祭礼に択びて興を一時に遣らむ乎是れ従来我地方に行はるゝ所にしてまた古来最も普通に行ふ所なれども僅に其日を過ぐれば煙散霧消何等奉祝の痕跡を留むるなきを奈何せん是に於て余輩発起人相会し当町に普通文庫を設立して以て奉祝の意を表せむことを決議せり（略）

#### 4、富山県中学

富山県中学（注1）が一八八五年二月に開校した時、源之助は創校一期生として入学したという。黒田源太郎は『炉辺夜話』の中で、「一商店の徒弟として置くよりは、中学校に入れて学問をさせた方が善いと勸むる人のあつた」ために源之助が進学したと記し、一緒に入学したのは「林茂、寺崎由之助、中村助松、竹内乙一郎、青山松太郎、岩崎文次郎、大島茂」の八名をあげている。また、

君は進んで第二年に入るや、三月の試験休暇中の或日、学友岩崎文次郎、大島茂（元五島と称す）の二人と相語らひ、無断退学して東京へ逃げたとも記されている。

『富中高百年史』（注2）には、富山県中学が開校した当時は二月と七月に新入生を募集し、二月当初は一八八名の入学生がいたと記されている。もともと、『富山県尋常中学校第五年報』（二八九〇）の卒業生の記録を見ると、入学した月にばらつきがあり、募集の月に関係なく入学する者があつたことがわかる。同窓会の『会報』第三號（注3）によると、一八八九年の第一回卒業生は二十三名しかない。そこには魚津から県中学へ入学したといわれる八人の中で、唯一「法学士 林茂」の名だけが記されている。第二回卒業生の中に「実業家 青山松太郎」の名があり、八人のうち卒業したのは二人しかいないことがわかる。ただ、青山松太郎が入学したのは「十九年二月」と記録されている（『富山県尋常中学校第五年報』）。卒業生の回顧録（注4）には、「一五年生の岩城梅次郎、平田柏之助、細川貞篤、江口辰太郎、大管定治、中村助松、青山松太郎、竹内乙一郎、二川保平（後香川保志に改む）水島貞夫の十名が生徒総代として富山県庁に出頭」と、大谷津直麿校長に反発した「富中のゼネスト」の代表者が記されている。この記述から青山松之助、中村助松、竹内乙一郎が同級だったことがわかる。また、中村松之助は「大正、昭和初期ころの魚津情勢あれこれ」『魚津史談』一九九六・三）に、

祖父の中村助松は、富山に初めて中学校が開校されるや、当時魚津から通学していたものは八人で、そのうちの一人でした、著名な友人に、

横山源之助（日本下層社会Ⅱ岩波文庫）や

南 弘（富山県初の大蔵大臣Ⅱ通信大臣）がいました。

と書いている。南弘については、『文武会報』（注5）の、「展覧会出品目録」に第二回卒業と同年であることが記さ

れている。

これらの記述を見ていくと、魚津の人たちにとつて富山中学が開校した一八八五年入学者も翌年の入学者も、「創校当時の中学生」として一括りに記憶されていたのではないかと推測される。源之助が確かに一期生だったかどうかは、現時点で残る記録からは明らかにすることはできない。それでも源之助が開校したばかりの富山県中学に通つていたことは、当時の校長田中貞吉（注6）について書いた「南米移民の卒先者田中貞吉氏」（注7）の、

帰朝した田中氏は、眼中英雄なき東洋流の人物の事として、官途にも就かずに居たが、友人等の勸むるに任せて、海軍省に入つて、初めて給金取になつた。後ち、吉井友実氏に容れられず、都会を離れて、地方の中学校長と為つた。それは当時石川県より分離した富山県最始の中学校々長と為つたのである。余等が同氏を知つたのも、此の中学校々長時代である。中学校長としての田中氏は生徒には極めて評判の好い校長で、今日富山県出身の者で、博士となり、学士となり、士官となり新聞記者となつて、世間に名を知られてゐるものは、大抵氏の校長時代に中学生徒であつた連中である。

（『横山源之助全集』第七卷）

という記述からも明らかである。

ともに上京し書簡往復があつた岩崎文次郎との親交はもちろん、中村助松とも第八代六郎兵衛澤田長之助宛の書面から親しい交流が推測される。青山松太郎は、魚津町の戸長にも名前が見られ、魚津文庫設立者にも名を連ねている。魚津に関する多くの記事を書いた源之助の情報源が、澤田家だけでなくこのような同級生たちでもあつたと推測できる。

注1 現 富山県立富山高高等学校

- 注2 一九八五・一〇 富山高等学校創校百周年記念事業後援会
- 注3 一九一七・一〇 富山県立富山中学校同窓会
- 注4 第四回卒森井周義「富中時代の思出」『富中回顧録』一九五〇・九 富山県立富山中学同窓会
- 注5 一九三五 一一一 富山県立富山中学校文武会
- 注6 『富中高九十年のあゆみ』(一九七五・一〇 富山県立富山高等学校同窓会)によれば、田中貞吉は一八八五年一月に初代校長として就任、一八八七年一二月に退任した。
- 注7 原出…東西南北生「海外に於ける活動の日本男児」明治一九〇六・一『商業』、有磯逸郎『海外活動之日本人』一九〇六・一〇

5、おわりに

明治期の富裕層のステータスシンボルとして文学があつたのは、魚津に限らず樋口一葉が通つた萩野舎をみても明らかである。第七代澤田六郎兵衛は俳句を、阿波加脩造は漢詩を中心とした社交倶楽部のようなものが、魚津の富裕層の中で作られていたと考えられる。その中で公共事業の補助や貧民救済の相談がされ、その延長線上に三拾ヶ町聯合会のような公的な会が生み出されていったのではないだろうか。澤田家で徒弟をするという絶好の機会を得た源之助は、文学的表現力を磨き、社会問題を見つめる眼を養つたのである。そして、魚津で親交のあつた人々たちによつて築かれた源之助の情報網によつて、魚津の生活や困難をありのままに発信することができた。魚津の人々によつて社会問題を正面から見つめ表現する横山源之助が創られたのである。

『群峰 3』正誤表

P4 下段 023 日新 → 日清

P4 下段 032 萩野舎 → 萩の舎

P10 上段 014 萩野舎 → 萩の舎



文学大系42』六の付録の「宇治拾遺物語類話一覽」でも指摘されている。<sup>七</sup>

しかし、ヘルン文庫の書架番号21110、21111の《今昔物語 上―下》<sup>八</sup>には「今昔物語集」の話が全て収録されているわけではない。上巻の凡例に「此書を載る所の事。著聞集。宇治拾遺。十訓抄等を出たるをバ皆略して記せず」―「此書教巻。急に印刻しがたし。(中略) 日本部三十巻を梓行す」<sup>九</sup>と書かれてるように、いわゆる抄録本である。巻二〇は仏法部に当たり、資料1に示したように「常識」の原典との説がある「愛宕護山聖人被ル謀野猪二語第十三」は《今昔物語 上―下》には収録されていないことがわかる。つまり、八雲は「愛宕護山聖人被ル謀野猪二語第十三」を読んでいなかったと思われる、原典は《宇治拾遺物語抄 上巻―下巻》の《獵師、仏を射る事》と推定できるのである。

### 誰の書き込みか

次に筆者が調査して分かった原典への書き込みについて見ていきたい。《獵師、仏を射る事》への書き込みは資料2の通りである。

「常識」の原典となった《獵師、仏を射る事》は約四ページの話であり、全体にわたって書き込みされていることが分かる。《獵師、仏を射る事》への書き込みについては、ヘルン文庫蔵の《宇治拾遺物語抄 上巻―下巻》が「富山大学学術情報リポジトリ」<sup>一〇</sup>でPDF公開されているので、確認してほしい。

ここで、この書き込みが誰によるものかということが問題となってくる。候補としては、①和漢書をもとに作品を書いた八雲自身、②八雲に読み聞かせていたと考えられる妻のセツ、③古本であるので以前の所有者、の三者が考えられる。

### 資料2 《宇治拾遺物語抄》の「常識」関連部分への書き込み

下巻3		下巻2			下巻1							頁			
「火をうちけつごとく」	をい／＼	「いかぢは」の「じ」	「いかぢは」の「い」	やう／＼	「よに」	「よに、たふとき事」の	「経をたもち奉りて」の	「たもち」	餌袋	坊	年比行ひて	おこなふ聖	事」という題名	一(一) 獵師、佛を射る	
右隣	右隣	右隣	右隣	右隣	右隣	右隣	右隣	右隣	余白	右隣	右隣	右隣	頭	場所	
すと同じ	あ／＼／＼	論	ア	漸々	甚	ぼさち	読	チ歩ク袋	餌袋入レテ食	餌袋入レテ持	餌袋之ニ厲	年久しく	務行をして	×	書き込み内容

この中で八雲自身である可能性は極めて低いと思われる。これらの書き込みにはひらがなや漢字、「ヲ」が使われて

いる。しかし、八雲が妻のセツに宛てた手紙を見ると、八雲はひらがなをほとんど使わず、助詞の「ヲ」も使っていない。一方、染村絢子<sup>三</sup>が一つの書き込みを例に『つ』が『ち』となるのは『英語覚書帳』でも見られる」と指摘しているように、セツの癖が表れている部分があり、それ以外のものもセツによるものである可能性が高いと思われる。ほかに決定的な証拠がなく、以前の所有者である可能性も捨てきれないが、後述する「常識」と書き込みの関連の深さから、私はセツの書き込みであると考えたい。

## 八雲の「常識」と原典との比較

では、「常識」とはどのような話なのだろうか。あらずじは次の通りである。

愛宕山の信心深い和尚は最近普賢菩薩が寺にやってくることを訪ねてきた獵師に話す。獵師は不審に思うが、その夜、和尚が言ったように普賢菩薩が現れた。和尚と小坊主はひれ伏して経文を読んでいるが、獵師はその後ろから普賢菩薩を矢で射てしまい、射られた普賢菩薩はたちまち消えてしまう。翌朝、その場所から矢に射抜かれたタヌキの死骸が見つかった。信仰にあつい僧侶も簡単にだまされるが、無信仰な獵師は常識を持っており、それを見破ることができた。

このような内容の「常識」と原典について、原典に書き込みがあった部分を比べてみたい。◇は八雲が書いた原文である「COMMON SENSE」、○は原典の「獵師、仏を射る事」<sup>一五</sup>の文章である。○以下は書き込み内容を含めた考察である。なお、傍線は八雲によって加えられた部分、破線は削除された部分、波線は表現などが大きく変更された部分である。

### (1) 削除

◇該当なし(該当なし)

○年比行て坊を出づる事なし」の「坊」の右隣に「寺」と書き込みがある。「常識」では、この部分が削除されているが、次に指摘する(2)の部分などで「寺」という言葉が使われているため、「坊」は「寺」だという説明をセツがしたと考えられる。

### (2) 追加

◇The little temple in which he dwelt was far from any village ; and he could not, in such a solitude, have obtained without help the common necessities of life. But several devout country people regularly contributed to his maintenance, bringing him each month supplies of vegetables and of rice. (その住んでいる小さな寺は、人里から遠く離れていて、そんな寂しいところでは、たれか世話でも見てくれるものがなければ、日々の暮しもなにかと不自由がちであつた。が、さいわい、信心ぶかい山家の人たちが、月々、かならず米や野菜をもつてきては、この坊さんの暮しを見てやつていた。)

○該当なし  
○新たに背景説明が書かれており、(1)で指摘したように「Temple (寺)」という言葉が加えられている。

### (3) 変更と削除

◇One day, when this hunter had brought a bag of rice to the temple, the priest said to him (ある日のこと、この獵師がお寺へ一袋の施米をどげに行くと、和尚がこんなことをいった。)

○久しく参らざりければ、餌袋に干飯など入てまうでたり。聖悦で、日比のおぼつかなさなどの給ふ。その中に居寄りの給ふやうは、



○「餌袋」という言葉の上の余白に「餌袋<sub>ニ</sub>之<sub>ニ</sub>鷹<sub>ヲ</sub>入レテ持歩ルヲ轉テ食物ヲ入レテ持チ歩ク袋」と書き込みとなっている。一方、「常識」では「a bag of rice」(一袋の施米)となっていて、「一袋の施米」としたようである。セツが書き込みにあるような説明を八雲にし、「食物を入れて持ち歩く袋」という説明を聞いた八雲が、西洋の読者にもわかりやすいように、「干飯」を「米」にしたのではないだろうか<sup>六</sup>。

(4) 追加

◇ it is possible that what has been vouchsafed me is due to the merit obtained through these religious exercises. I am not sure of this. (勤めの功德かとも思われるが、まさかそんなはずもあるまい。)

○「経をたもち奉りてあるしるしやらん、  
○「経をたもち奉りて」の「たもち」の右隣に「読」と書き込みがある。「常識」では、その前の部分で「読経と三昧」となっている。セツが「たもち」の意味を「読む」と説明したと思われる。

(5) 追加

◇ that Fugen Bosatsu comes nightly to this temple, riding upon his elephant. (毎夜当山へな、普賢菩薩が白象に召かれてお越しになられるのじやて。)

○この夜比、普賢菩薩、象に乗りて見え給。  
○「菩薩」の右隣に「ぼさち」と書き込みがある。このことについては、染村絢子<sup>七</sup>が『う』が『ち』となるのは「英語覚書帳」でも見られる」とセツの書き込みである可能性が高いと指摘している。

(6) 変更

◇ And, in another moment, the elephant with its shining

rider arrived before the temple, and there stood lowering, like a mountain of moonlight a wonderful and wondrous. (と  
思ううちに、光り輝くお姿をのせた象は、早くも寺の門前  
へお下がりになって、ちようど月光の山のように、あやし  
くものすいへ、そびえるように高だかとお立ちになった。)  
○見れば、普賢菩薩、白象に乗て、やうくおはして、坊の前に立給へり。  
○「やうく」の右隣に「漸々」の書き込みがある。『新大系42』の脚注によると、「しずしずと。おもむろに」という訳になっている。しかし、八雲はより多くの情報を入れて詳しくしている。

(7) 追加、削除、変更

◇ Then the priest and the boy, prostrating themselves, began with exceeding fervour to repeat the holy invocation to Fugen Bosatsu. (和尚と坊主とは、その場にひれ伏して、一心不乱に経文を読みあげている。)

○聖泣くく拜みて、いかに、ぬし殿は拜み奉るや」といひければ、「いからは、この童も拜み奉る。をい〜。いみじうたうとし」とて。  
○「をい〜」の右隣に「あ〜」の書き込みがある。  
(6)と同様に『新大系42』の脚注によると、「はいはい」という訳になっているが、八雲は会話の部分を書いておらず省略しているようである。

(8) 追加と削除

◇ Immediately, with a sound like a thunder-clap, the white light vanished, and the vision disappeared. Before the temple there was nothing but windy darkness. (たちまち、落雷のような大音響とともに、かのこうこうたる光りはぱつと消えた。とたんに、菩薩のすがたも、かき消すごとくに消え失せた。あとにはただ、門前にさ〜さ〜と吹きすさ

ぶ夜風の闇があるばかりである。)

◎火をうち消つごとくにて光も失せぬ。谷へとゞろめきて  
逃行音す。

○「火をうち消つごとくにて」の「けつごとく」の右隣に  
「すと同じ」と書き込みがある。つまり、「けつ」は「消  
す」と同じだという意味であると考えられる。「常識」で  
は「disappeared」(かき消す)とくに消え失せた)となつ  
ており、書き込み内容が反映されていると言えるだろう。

以上、八雲の「常識」と原典となつた『宇治拾遺物語』  
の「獵師、仏を射る事」について、書き込みがあつた部分  
を比べてみた。

語注など一部の書き込みについては、セツがこれらの書  
き込みに沿つて読み聞かせたとと言える。ちなみに、『宇  
治拾遺物語抄』への他の書き込み内容は、上巻八〇ページ  
の「おどろき」に対する「目のさめる」や上巻八三ページ  
の「つゆー」に対する「少しも」、下巻二四ページの「あて  
やか」に対する「上品」など語注が多い。そのほか、下巻  
二四ページの「えい」を説明するために絵も描かれている。

このように、書き込みは語注などが多く、原典の内容を  
より理解するためのものであると考えられる。原典をセツ  
から聞いただろう八雲が書いた「常識」は、原典よりも詳  
しく具体的になつており、書き込み内容の影響を強く受け  
ていると言えるだろう。

今回は原典に書き込みがあつた部分について、追加や削  
除、変更内容を見てきたが、今後は書き込みがない部分も  
含め、全体を通してそれらを見ていきたい。この過程で、  
八雲が原典をどのように理解し、何を読者に伝えたかつた  
のかが明らかになるのではないかと考えている。

## 主な参考文献

- ・ 田部隆次『小泉八雲(第四版)』(北星堂書店、一九八〇  
・一)
- ・ 森亮『小泉八雲の文学』(恒文社、一九八〇・八)
- ・ 小峯和明校注『今昔物語集四 新日本古典文学大系36』  
(岩波書店、一九九四・一一)
- ・ 富山大学附属図書館編『富山大学附属図書館所蔵ラフカ  
ディオ・ハーン ヘルン(小泉八雲)文庫目録 改訂版』  
(富山大学附属図書館、一九九三・三)
- ・ 小泉時、小泉凡編『増補新版』文学アルバム小泉八雲』  
(恒文社、二〇〇八・一一)
- ・ 染村絢子『原典——活字本から版本へ——』(「へるん」  
二五号、一九八八・六)
- ・ 小泉和弘「ハーンの『常識』に関する考察」(芝浦工業  
大学研究報告人文系編)三六巻一号、二〇〇二)

※本稿は、拙稿「小泉八雲『常識』研究——ヘルン文庫書き  
込み調査から——」(富山大学大学院人文科学研究科論集  
第九集、二〇一一・二)を基に行つた富山文学の会第四九  
回例会の発表要旨である。

一 八雲に関連する作品等の本文内での表記については次のよう  
にした。八雲の著作は『』、その中の個々の作品は「」、ヘルン文  
庫所蔵の書籍は《》、その中の個々の作品は◇でくくつた。

二 森亮『小泉八雲の文学』(恒文社、一九八〇・八)には「『再  
話文学』という用語は平井呈一氏が使い始めたものらしい」と書  
かれている。平井は「八雲と再話文学」(『日本雑記他』所収)で  
「『再話文学』とは(略)“retold tales”あるいは“twice-told stories”  
の意味でありまして、八雲独特の作品形式、あるいは手法を、か  
りにわたくしがそう名づけたものである」と述べている。

- 三 田部隆次『小泉八雲(第四版)』(北星堂書店、一九八〇・一)
- 四 富山大学附属図書館、一九九九・三

五 平井呈一訳『怪談・骨董他』（恒文社、一九八六・四第二版）の「参考資料」

六 三木紀人、浅見和彦、中村義雄、小内一明校注、岩波書店、一九九〇・一一

七 ちなみに『新大系42』の脚注には次のようにも書かれている。

「愛宕の事件となっているが実は外国種の話らしく、この類話がミヒヤエル・エンデの『満月の夜の伝説』として見える。インドの民話にもとづく物語という。本話はこれと同源でもともとは仏典にもとづくものか」。もしかすると、八雲は同じようなインドの民話も読んでいた可能性もあるが、ここでは言及しない。

八 井澤節校訂纂注、出版者は辻本九兵衛、一八九六。

九 「国立国会図書館デジタルコレクション—今昔物語前編」(URL: <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1939054>) 「国立国会図書館デジタルコレクション—今昔物語後編」(URL: <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1939324>) (二〇一七年一月確認) 参照。

一〇 「へるん文庫」のWebサイトにリンクが貼ってある。

直接は (URL :

[https://toyama.repo.nii.ac.jp/?action=pages\\_view\\_main&active\\_action=repository\\_view\\_main\\_item\\_detail&item\\_id=13213&item\\_no=1&page\\_id=32&block\\_id=36](https://toyama.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=13213&item_no=1&page_id=32&block_id=36)) (二〇一七年一月確認) 参照。

一一 小泉時、小泉凡編『増補新版』文学アルバム小泉八雲』（恒文社、二〇〇八・一一）を参照した。

一二 『原典』—活字本から版本へ—（「へるん」二五号、一九八八・六）

一三 西田義和編註『L. Hearn's SHORT STORIES』（文化書房博文社、一九九八・一一）

一四 平井呈一訳『怪談・骨董他』（恒文社、一九八六・四第二版）

一五 三木紀人、浅見和彦、中村義雄、小内一明編注『宇治拾遺物語 古本説話集 新日本古典文学大系42』（岩波書店、一九九〇・一一）

一六 小泉が原典と考えている『今昔物語集』では、「菓子」とな

っているようで、「菓子」というのは、現代では果物のことで、猟師が持参するには気が利き過ぎていると考えられるので、ハーンはより現実的な（米）に変えたものと考えられる」と述べている。

一七 『原典』—活字本から版本へ—（「へるん」二五号、一九八八・六）

一八 書き込みについて考察するためにはセツがどの程度教養を備えていたかを検証することが必要である。今後の課題としたい。

# 北方の冬 高島高論

金山 克哉

## 一、〈冬〉と詩

井上靖の有名な「青春」(『季節』講談社 昭和四十六年十一月)という詩。若き日の靖が詩を書いた一枚の原稿用紙を懐に入れ、田舎の中学教師をしている詩人のもとを訪ねるシーンからこの詩は始まる。夕食をご馳走になり詩人宅を辞し、吹雪く中、マントを目深にかぶって駅へと急ぐ靖の姿が目につかぶ。「石動」という駅でストープに身を寄せながら終電車を待った記憶が、四十年の間に幾度となく思い出された靖は言う。小説家として名をなす以前の、詩心を豊饒にたたえた一人の青年の姿がここには描かれており、富山県「石動」駅はいつまでも雪降る記憶の中で駅のストープの温もりとともに灯り続けている。井上靖にとつての〈冬〉は、自身の詩的出発を彩る記憶の中で生きている。

同じ井上靖の詩に「雪」(『運河』筑摩書房 昭和四十二年)がある。

雪が降って来た。

鉛筆の字が濃くなった。

こういう二行の少年の詩を読んだことがある。十何年も昔のこと、「キリン」という童詩雑誌でみつけた詩だ。雪が降って来ると、私はいつもこの詩のことを思い出す。ああ、いま、小学校の教室という教室で、子供たちの書く鉛筆の字が濃くなりつつあるのだ、と。この思いはちよつと類のないほど豊饒で冷徹だ。勤勉、真摯、調和、そんなものともどこかで関係を持つている。

「雪」と「鉛筆の字」との詩的な関係。子供たちの書く字が濃くなることは「勤勉」「真摯」「調和」との結びつきがある。と連想するところは、人間の人間たる豊かさを想起する靖の感受性が見てとれる。字を書く、という学習の基本の中にある学びへの姿勢、一面ずつを丁寧処理する誠実さ、余白と軌跡とのバランスなど、そのまま人生全体につながる人間的な尊厳がこの詩の中に息づいている。井上靖にとつての〈冬〉とは、この二つの詩に見られるように独自の静謐さをたたえたものであった。

また、近代の詩人中原中也は「冬の夜」(『在りし日の歌』昭和十三年)において次のように歌った。

空気よりよいものはないのです

それも寒い夜の室内の空気よりもよいものはないのです

冬の夜に、ひとり室内の空気の冷たさに感じ入る詩人の姿が髣髴とする。

例えば、井上靖と中原中也。彼らは〈冬〉を自身の感覚や記憶に惹きつけて見事に変奏して見せ、詩の言葉に定着して見せた。逆の言い方をすれば、詩の表現だからこそ〈冬〉に独自の滋味を加えることに成功している。

高村光太郎もまた、「冬が来た」(『道程』大正三年)の中で「きつぱりと冬が来た」とうたう。

冬よ

僕に来い、僕に来い

僕は冬の力、冬は僕の餌食だ

ストイックな姿勢で「冬」を受け止める「僕」の姿勢は気概に満ちている。その他にも『測量船』(昭和五年十二

月二十日)所収、三好達治の有名な二行詩「雪」(太郎を  
眠らせ太郎の屋根に雪ふりつむ。/次郎を眠らせ次郎の屋  
根に雪ふりつむ。)なども日本の民族的な(冬)が描かれ、  
そこはかとない空間の広がりを感じられる。

ときに、季節とは何か。殊に、厳しい冬はなにゆえに我  
々のもとにやってくるのか。冬の存在は我々の精神に何を  
もたらすのか。そのような疑問のもとに本稿は書かれてい  
る。

そして、郷土富山の詩人である高島高もまた(冬)を多  
く描いた人である。明治四十三年(一九一〇年)富山県滑  
川市に生まれ、小学、中学、高校時代を富山で過ごし、昭  
和三年(一九二八年)に日本大学予科に進学、東京で文学  
に親しんだ。医師であった父の願により、日本大学を中  
退、昭和医学専門学校(現・昭和大学医学部)に入學し、  
医師としての資格を身につけ、横浜市の電気局病院の内科  
医として勤務。のち、父逝去により富山に戻り、地元滑川  
の医院を継ぐことになる。

萩原朔太郎をして鴉のような風貌を連想させ、その「鴉」  
が「今この詩集の中で、北国の暗い森や、氷の張りつめた  
平原や、白く雪に光る山脈の上を飛びながら、ニヒリスト  
の哀切な悲歌を歌っているのだ」(高島高『北方の詩』「序」)  
と言わしめた高島。方法的には「詩と詩論」に見られる新  
散文詩運動の流れを組むものであったが、その描かれる対  
象は多くが北アルプスであり、太古から変わらぬ明滅を続  
ける蛭島賊の群のすむ滑川の海であったりした。また、立  
野幸雄は詩集『北方の詩』について、「立山連峰に託した  
もの」であり「北国の山々を力強く男性的に歯切れよくう  
たい」「風土に根差したロマンが胸を打つ」とする。高島  
は富山に戻った後も、自らが編集した「文学国土」「文学  
組織」において白蠟色に染まる立山の姿に幾度となく触れ  
ている。

本稿では、高島高の詩における(冬)の位相について考  
察し、改めて「冬の詩人」としての姿をとらえなおしたい  
と考える。

## 二 鑑賞「北方の詩」

高島高の第一詩集である『北方の詩』(ボン書房 昭和  
十三年七月)には四十四篇の詩が収められている。そのう  
ち冬の詩が十八篇、春の詩が二篇、夏の詩がなし、秋の詩  
が一篇であった。また、特定の季節に分類できない詩が二  
十三篇であった。どの季節を選択して詩を書くか、という  
問題はその詩人の資質に関わる重要なテーマとなる。では、  
高島高の詩の特徴とは何か。虚構(文学)だからこそ描く  
ことができた(冬)とはどのようなものであったかを考え  
たい。

山脈を馳けてゆく白馬のむれがある

空は虹のパンセを孕んでか

朝あけは雲など呼んで

いま山麓の雪を踏む牛群

草は見えない

この冷却の皮膚下に

草は生きている

このひろびろとした高原は生きている

ほのおするものは—— 水だ

はりつめてこわれそうな

この十行で書かれた短い詩は、萩原朔太郎、北川冬彦が  
序文を書いた第一詩集『北方の詩』(ボン書房 昭和十三  
年七月)の巻頭を飾る高島高の代表的な作品である。

「馳けてゆく白馬のむれ」はイメージであらうか、写実  
であらうか。大事なことはその判断ではなく、この詩の中

には確かに白い馬たちが息づいているということだ。「空は虹のパンセを孕んでか」、七色の思考が山脈の上の空を彩り、晴れ間が広がっていく様が想像できる。朝の虹はほかに雲がかり、「牛群」が山麓に息づく。詩の前半は雄大な北の山脈の姿が生き生きと描かれる。

しかし、この詩の魅力は後半にこそある。「草は見えない」という一行から、雪、つまり「この冷却の皮膚」が草原をすっかり覆ってしまっていることが理解される。「この」とあることから、視点が雪原に接近していることが伝わってくる。草は隠されているけれども確かに雪原の下に存在し、見えないけれどもまさに生きている大地の鼓動のようなものが伝わってくる。高原そのものが生きているという表現から、山そのもの、冬そのものが生命をたたえた存在であることが見てとれる。そして何よりも、「ほのおする」という動詞がこの詩の核となる。「ほのお」という名詞を動詞化して創られたこの独自の詩語は、おそらくは「いのちを燃やす」という意味を持ち、「氷」はその冷たさを増せば増すほどに「氷」としてのいのちを燃やしているということになる。燃えているものは寒冷の象徴である。「氷」である。冷たいものが燃えている、という一見矛盾した論理になるが、「氷」は「氷」としてのいのちを燃やしている。そしてその「氷」はあくまでも「はりつめてこわれそうな」緊張状態である。硬質な緊張が創り出す清冽なもろさ。「ほのおする」ものの健気なまでのいのちの燃焼と、その代償としてのいのちの儂さが両義的に含まれている。

あらゆるものが「ほのおする」北の山脈世界。高島高が描く〈冬〉の世界には、冷たくも燃え、夾雑物の介入を許さない清澄な自然の厳しさがある。

### 三 〈春〉と〈冬〉の比較論

詩集『北方の詩』には二篇の春の詩がある。冬の詩が圧倒的に多い中で春の詩。そのうちの一つ、「早春」を概観したい。

#### 早春

きれぎれにみだれ飛ぶ白雲  
柵にもたれてじっとみつめている  
草を喰んではものうげに見上げる  
まだら牛等の瞳

網膜には雪解けの山々がものかなしいのであろうか  
牛等はだまり合い  
くる土の湿りを踏んでいる  
いつの日きえてゆくおもいであろうか  
いつの日とけてゆくうれいであろうか  
めまぐるしくながれる生活の日々  
たとえばほてる血潮のように  
それはせきこむ流れのように  
ただあてどなくかき狂い押しながされてゆく日々だ

この詩は長さといい、登場する動物といい、「北方の詩」の春バージョンだと考えることができる。また、そのように仮定して双方を比較してみると、いくつかの違いに気づくことができる。

「北方の詩」では「白馬」は山脈を駆けてゆき、「牛群」は雪を踏みしめている。冬山の幻想的な情景から詩が始まっていたが、「早春」では「牛等」は「柵」に閉ざされているのか「ものうげ」であり「だまり合」っている。そこには「北方の詩」に見られるような躍動感を感じられない。また、詩の後半部分の比較をしてみても、「北方の詩」においては、「冷却の皮膚下」には確かに息づく生命力が感

じられ、「ほのおする」ものとして氷もまた寒冷なる存在としての自身の在り方を十全に生きている。しかし、「早春」後半部においては「めまぐるしくながれる生活の日々」の中で「ただあてどなくかき狂い押しながされてゆく日々だ」という、詩的なイマジネーションの飛躍というよりは、生活苦の中に埋没する想像力の硬直が描かれているように感じられる。

「早春」には春が訪れたことに対する喜びや明るさはない。むしろいかんともしがたい無為の日々に対する空しさばかりが描かれているようにも思われる。かつ、冬の厳しい寒さが和らぐことによつて、寒冷の中に保存されていた「はりつめてこわれそうな」いのちの存在そのものも緩和されて失われてしまったような印象をうける。弛緩した

（春）の姿がここにはある。だから、「北方の詩」に描かれた（冬）は、いのちの燃焼を厳寒の中に保存し、それが溶け出して流れてしまわないうようにする、一種の「いのちの燃焼を閉じこめておく冷蔵庫」のような役割を果たしているのではないか。春の暖気の中では感じることでできない存在の確かさが、まさに（冬）の冷気の中でこそ冴え返って息づくものとして認識されているのではないか。

#### 四 （冬）の諸相

高島高は「麵麴」の活動を通じて北川冬彦と知り、「詩と詩論」が提唱した新散文詩運動、短詩運動の理論を自らと詩法の中に取り入れた。『北方の詩』には様々な詩形が実験的に盛り込まれており、高島高の詩の特徴を形作っている。この章では、言語芸術として様々な方法で描き出され、認識された（冬）の諸相について触れていく。

#### 北方の冬

1 枯木をめぐる風は日に日に捨て残された落葉等をさらについで幾たびも暗い雲等は何か噂し合つては流れていった。浸潤された地層よ、

2 落葉の色にしみた地層の腐敗物質について枯枝の上で終日小鳥は考えこんでいるのであろうか。ときには盲いた風がその掠毛をささきびしく吹きながつていったのだった。

3 小鳥はもう飛べないのかもしれない

4 思い出してからもう十日。はるか剣氷の刃をかすめて冬ごとに幾年も幾年も私は待つている人のことを。

5 鉛色に截断された風景を截断する水溜りの上の枯枝の上で小鳥は終日考えこんでいた。

「陰影のある水溜り」「暗い雲」「剣氷の刃」「鉛色」などの詩語に北方の灰色の冬が思い出される。色彩のイメージは重く暗い。そして「浸潤された地層」は「腐敗物質」を含み、あらゆるものを腐らせ土に還そうとする。生命が解体されてゆく冬の姿が寒々と描かれ、「小鳥」は飛び立つこともできず「終日考えこんでいる存在としてあくまでも静的である。この詩は昭和十一年（一九三六年）、高島が昭和医学専門学校卒業後に「麵麴」に投稿した作品である。

また、『北方の詩』には様々な短詩が存在する。

## 雪崩

何喰ぬ太陽が  
ボンヤリ照っている

この詩は雪山における雪崩の危険性をスナップ風に描くユーモアがある。「何喰ぬ太陽」のもとで今にも雪崩が起きそうな危険な風景が描かれる。雪崩の危険を全く気にもしない「太陽」との対比が面白い。

## 吹雪

目をたたたく  
唇までたたたく  
そしてゆき過ぎる

激しい勢いで吹き付け、過ぎ去っていく吹雪の様子を「たたたく」という皮膚感覚で表現しようと試みている。「雪崩」も「吹雪」も（北方）世界の部分的な要素を切り取って結晶化している。限定された言葉による簡潔な世界が逆に、（冬）のある一面を鮮明に描き出している。

## 五 東京と（冬）

これら（冬）の詩を所収した『北方の詩』は、昭和十三年七月に東京の豊島区にあるボン書房から出版された。今ここで問題にしたいことは、これら（北方）（冬）を満載した詩集が、高島が東京にいるときに、東京の出版社を通じて世に出ていることである。その事実から読み取れるいくつかの仮説をここで示したい。

まず、東京にいたからこそ言語化できた（北方）があったというのである。「北方の詩」のイメージネーションは、故郷の言語で写実的に北国を描いたものとは明らかに異なる詩の言葉としての（北方）は、生まれ故郷の外に生活せられた言葉としての（北方）は、生まれ故郷の外に生活する経験をした者が持ち得る対象との距離を保っている。その距離が「北方の詩」の前半部分の幻想性を生み、後半部分の生命観の力強さを支えていると私は考える。かつ、（北方）というモチーフを言語化するにあたってモダニズムの手法を『北方の詩』に柔軟に取り入れた点が評価されるべきである。高島にとつて土着の世界である北国は、あくまでも自身の経験や記憶と密接に結びつき、それを多数の読者に向けて開示していく場合、個人的な経験や記憶が詩の世界の広がりや限定してしまう可能性がある。つまり、独善におちいる危機を孕んだモチーフ、それが（北方）であった。モダニズムの手法は、高島の詩を粘着質で個人的な歴史から解き放ち、「個人的な北国」を、多くの読者に送り届けることのできる「詩の世界の（北方）」にまで研ぎ澄ませることを可能にしたのではないか。そのストイックな作風を、例えば北川冬彦は「男性的」と表現したのかも知れない。

さらに、高島の（北方）に関する詩は、東京で出版されたことから、都市生活者の視点からみたエキゾチックな世界をあえて現前させることに力点が置かれていると考えることができる。そこには自分の故郷を形象化して都市生活者の前に現前させたいという高島の思いがあったのではないか。都市生活者の頭の中で描かれた北国の姿、つまり都市生活者が内包する地方のイメージを詩に結晶化させることによつて、東京の詩壇において独自の作風を作り、他の詩人との差異化を図ることができたのではないか。戦略的、と言えば言い過ぎかもしれないが、自身の内奥に広がる自然の風景を自らの詩的特徴として中央詩壇に立つこと



ができたことは、高島にとつては大きな自信にもつながつたはずだ。

『北方の詩』の〈冬〉には人間の生活はほとんど描かれていない。徹底した寒冷の風景が様々な手法で定着されている。なぜか。それは恐らく、誰が読んでもそこに厳然として存在する〈北方〉の姿を描くことを心がけた高島の創作方針が息づいているからではないか。慣習に塗り込められ、情に揺れ動く人間の生活の断面は、ここではあえて描くことが抑制されていると私は考えるのだ。

## 六 詩集『山脈地帯』の〈冬〉 人間と自然

私は、『北方の詩』が余人の解釈を許さない屹立した〈北方〉の形象化であり、同時に都市生活者が夢見る〈北方〉のイメージを映し鏡にして書かれた詩集であることを指摘した。「母」(母は／傷みやぶれた手風琴です)のように無季の作品で、かつ母親に対する思慕を含んだ作品ももちろんあるが、冬をテーマにした作品のほとんどが、抑制されたりリズムによって支えられている。

しかし、第二詩集である『山脈地帯』(旗社出版部 昭和十六年二月二十日)を読むと、同じ〈北方〉をモチーフにした作品でも、『北方の詩』に比べて人間の物語を意識的に描くダイナミズムが見て取れる。「山脈地帯 第一章」を読んでみよう。

あんな曇り雲が光るのは  
あれは山脈の雪のせいだ

曇り雲それ自身に発光体があると考えるのは

それは君の画かきとしての感覚のせいだ

本当の雲そのものは鉛色なんだ

どんなに白く見える雪だって

鉛色としての一種の光の要素をもっているんだ

それは色そのものとして受ける感覚より  
温度を失っているという冷却感のせいかも知れない  
だからこの裸木の立木なども  
雲の陰影の色というより雪の陰影の色といった方がた  
しかなんだ

(ところでこんな雪の地方では

何でもかんでも陰影を帯びてくるものなんだ

たとえば魂にだってあの裸木以上の陰影がさす)

だからあの山脈の壁々にある陰影などは

この地方の風景を現すに最も重要なシンボルなんだ

それは冷却感を表象することよりも

心理的な意味における神秘感にとつて重大なんだ

時々小鳥があゝの山脈の脊の上で叩き落とされるのは

あれは冷却感よりそのような神秘感のためかも知れな

い もつと云えばあれは鳥さえ落とすような鋭い刃物をも

っているんだ

(君にいつかはなしたろう

N村の美也子さんが雪の山脈の中で死んだことを

美貌で人間である美也子さんは勿論鳥とは一緒に出来

ないけれど

そのような神秘的な刃物で切られたことはたしかだね

しかし雪が解けてから美也子さんは鳥のように骨ばか

りになつていった

どつちかと云えば雪国の人は悲劇になれているね

これで一たん嵐になったら悲劇だなどという生やさし

いものじゃないんだから

東京生まれの君にもそれはわかるだろう)

この麓の村の人たちは死ぬことなどはなんとも思つち

やいなんだ

それはあらゆる自然現象と同じようにごく自然なこと

だと思つている

生とか死とか、そんなことは考えられないんだ  
その意味ではこの村人はニイチエ以上に超人だよ  
都会生まれの君が、その上芸術家である君が感ずる感  
覚などというものもこの村では一本の髪の毛より

も無用なものなんだ

彼らは子供を生んでそして死んで行くばかりさ

だからかえてこの雪の色がこんなに凄味のある陰影  
を僕らに与えるのかも知れない

恋愛だって恋愛それ自身としてはけっして感じて恋愛  
なんかしていないんだ

だからあの山脈の脊の上で鳥が凍死するのもあたりま

えかも知れない  
悲慘といえばこれ以上の悲慘がないね

（だがたつた一人美也子さんだけは考えたんだ

——しかし考えるものはここでは生きてゆけないんだ

結局鳥のように骨ばかりになるか狂うかより他に手が  
ないんだよ

そして相手の男は君どうなったと思う？

風は裸木をゆりうごかして吹いて来た

平原の雪がうずまきのような形で浮き立ち

どっしりとした雲が少しずつ山脈の脊の上で光った腹

を見せながら位置をかえはじめる  
（その男はね、美也子さんのような直接行動には行け  
なかつたんだ。卑怯といえは卑怯だがね。

——しかし、結局哲学に入つて行つて今ではもう流刑

人のようになつてしまつてゐるさ。

ここでは知性は必ず一種の復しうを受けるんだ。自然  
と文化の闘いと云うかね。ここではそれ程自然の偉力

というものは絶対的なんだ。自然にそむく者のことご

とくは手ひどい目に会ふのさ。考えてみれば無茶な話

だがね。それ程無智はここでは絶対的なんだ。都会生

活者の君にはこういうことはちよつとわかりにくいか

も知れないがね。そろそろ嵐になつて来たぞ。これは  
物凄い吹雪になるぜ。あ、その男が僕だつていうのか  
い？そんなことはどうでもいいじゃないか。ただ君に  
この風景を写生して貰うために、そしてこの風景たち  
の陰影を説明するため云つたまでの話さ。さああの  
森まで歩こう。あそこのアトリエにはもう火の用意も  
してあるはずだ。そしてあそこでは充分に、君の素晴  
らしいタッチによつて、この雪の山脈地帯の風景の再  
生が見れるとこまないようわけなんだ）

雪にめりこまないようにしたまえ  
君も知性人の一人だから、自然はどんな風にもこの自然

自身の陰影を増すための復しうをしないとかが  
らないね

あぶなかつたら僕につかまりたまえ

（第一章終わり）

附記 作者は第一章、第二章、第三章、夜明けを意図  
せる第四章まで書きしが、意に満たず後日を期しここ  
に第一章のみを発表す。

この物語風の長詩を読み進める上で、とりあえずは内容  
を二項対立に整理してみることが分かりやすいだろう。

・美也子	↑↓	男
・自然	↑↓	文化
・雪の地方	↑↓	東京（都会生活者）
・無智	↑↓	知性
・直接行動	↑↓	哲学

厳然たる自然の前ではあらゆる価値、思想、知性、美貌

は何の意味も持たない。この詩には、知性に寄りかかり「考えること」にとらわれる近代人を相対化する自然の力が描かれている。北方の山脈はその「陰影を増す」ために「神秘的な刃物」によって生き物のいのちを奪いその肉を土へと還元させる。そういったあらゆるものに平等に働く自然の力の下で生きていくということが、北方に生きる人々と自分たちとっては当然のことであり、都会に生きる人々と自分たちを差異化させることのできる要素であることが語られる。北の山麓に生きる人たちは「死ぬことなどなんとも思っちゃいない」存在であり、「死」は「あらゆる自然現象」の一つに過ぎず、「子供を生んでそして死んでいくばかり」の人生であるとは詩は言う。自我や個人を土台とした近代的な恋愛の意識はそこにはなく、共同体の中で行われる生殖の営みによっていのちをつなぎ、世を去る。知性に支えられた近代的な生活を志向する価値観はそこには見られない。しかし、ここで私が措定した二項対立はあまりにも単純である。なぜならば、この詩の中で描かれている（北方）はあまりにも原始的で、まるで（北方）には「文化」や「知性」が存在していないかのように語られているからだ。富山で育った高島高が、北国に対してこのような平面的な認識しか持ち合わせていなかったとは考えにくい。ゆえに、ここで描かれる（北方）もまた、やはり『北方の詩』において指摘したように、あえて東京を基準とした物差しで語られていると考えることができるのだ。「北方」||自然||無知||と「東京||文化||知性||という極端な物差しがここでは採用されているのだ。都市生活者から見た北国の異質性、他を受け付けない絶対的な新世界の存在を高島は意識してこの詩の世界観を構築していると考えられる。もし、北国を基準としてものを考えるならば、北国には北国の文化や民俗に根ざした知性が存在するはずだが、この詩の中ではそのような伝統的な地方文化に、おそらくは意図的に触れてはいない。

ただし、この二項対立に収斂されない存在として「美也子さん」「君（画かき）」「僕」が描かれていることには着目してよいだろう。厳然とした北国の冬をエキゾチックに描いた『北方の詩』との方法的な違いもまた、そこに発見することができよう。

生まれ、子孫を残し、死んでいくだけの習俗の中、「美也子さん」だけは「考えたんだ」と詩は言う。「美也子さん」は「美貌の人間」であり、「直接行動」をとって「雪の山脈」に入り、そこで「神秘的な刃物」で切られていのちを落とした。そして冬が過ぎて鳥のように白骨化した状態で発見された女性である。「美也子さん」が「雪の山脈」に対してとった「直接行動」が何を考えての行動かは明らかにされていなく、「無智」のままに生き、子孫を残して死んでいくこの北方の民の中にあつて「恋愛」というものを経験し、それがゆえに自然から「一種の復讐」を受けることになった女性である。自然の力の前に屈する存在の「美也子さん」ではあるが、「僕」はその生き方を記憶に留め、東京から来た「画かき」に話すのである。

「君」は都会からやってきた「画かき」である。「絵かき」である「君」は、この山脈地帯の陰影をアトリエでキヤンパスに「再生」させることのできる技能を持つ者である。そのような芸術性もまた人間の知性の産物であり、「この村では一本の髪の毛よりも無用なものなんだ」とされる一方で、絶対的な存在としての自然を人間の力によって認識、把握することができるとして希望を持って描かれてもいる存在である。絵を描くという行為は、モノを対象化し、その対象に自己を接近させる視点を獲得する知的営為でもある。「直接行動」をとって山に入った「美也子さん」とは異なり、「画かき」は知性による認識の「形態」としての絵画という方法で厳然たる自然と対峙しようとしている。そこには、知による自然の克服の意志が息づいていると考

えることができるだろう。

また、「僕」の位置を整理するならば、かつて「美也子さん」と恋に落ちたかも知れない存在であり、「哲学に入り」「流刑人」のようになってしまった存在である。かつまた「君」という「画かき」をこの山脈地帯に誘い、その陰影の深さを教えて絵に描かせようとすする存在でもある。そして最終行の「あぶなかつたら僕につかまりたまえ」という言葉からも分かるように、都会の知性を持ちつつもこの山脈地帯を生き抜くことができる土着の生活感を持った、いわば「自然と文化の闘い」の中を自由に行き来することができる人物として描かれている。高島高の伝記に還元すれば、この「僕」は東京と富山の両方の生活を知った高島自身の投影ということができる。

いずれにせよ、この「山脈地帯 第一章」には詩集『北方の詩』とはまた違った魅力がある。その魅力とは、(北方)の中に(人間)が息づいていることである。また、東京生まれの人間と北に生きる人間とが明らかな形で対置され、近代人がよすがとしている知性の脆弱さを自然の猛威と比較することで浮き彫りにしている。このような姿勢は『北方の詩』には見られなかった要素である。抑制されたリリズムの『北方の詩』、人間のドラマを物語風に描いた『山脈地帯』。この二つの詩集における(冬)の様相を比べてみれば、それだけで高島高の表現の幅の広さ、その詩集に付与すべき意図を選択する意識の確かさが分かるというものだ。

詩集『山脈地帯』からもう一篇、「故郷挽歌」を読んでもみる。

### 故郷挽歌

― 僕はこの若き日の詩篇を愛するがゆえに憎む

雲は低くて暗く

その上光るのは

あれは立山連峰の雪のせいだ

こんな重たい空気はめったにあるものではなく

(つるぎたてやま)

こんな鋭い山脈系はめったにあるものではないとい

うことは

この地方の風景画家たちのエスプリらしいが

ところで僕はたった今午後三時五十分着の

上野発列車から下り立ったばかりの旅の男だ

列車つかれの眼窓には

はるか山脈の頂上の雪の層がきらきら光り

この停車場の古風なことは

いつまでたってもまがった針の柱時計や

朽ちた四角柱の陰影やこわれた窓の窓ガラス

窓ガラスの外の積荷の陰には

幼なじみの×町のTさんやNさんがいるようだけ

ど

僕はなるべく知らないふりをしたので

切符を渡すと帽子を真深くかむり

さて雪道を先ず山麓の方に向けてとりたいたいと思う

町の中は今もやっぱり魚屋さんやお菓子屋さんや

銀行や荒物屋さんでにぎわっているだろうけれど

僕は今でも帰郷者でもなく成功者でもなく

一介の行きずりの旅の男だし

又町中自転車や乗合自動車をさけたりするのがうる

さいし

それにもまして町湯の噂たちに花をさかせてよるの

は業腹だ

僕の生れた町だというのはあの雪の中の灯だけでけ

つこう

あの灯たちを一つ二つとかぞえながら

今日はせめて夜中まであの山麓の雪道でもあてどな

くさまよい歩いてみよう

この詩には、詩集『北方の詩』の時点であえて抑制され、控えられたいた表現が堰を切ったようにあふれ出ている。抽象的な表現はむしろ避けられ、あくまでも具体的な表現が採用されており固有名詞の使用が目立つ。例えば「立山連峰」や「(つるぎたてやま)」などの詩語を見れば、はつきりと富山県の自然が連想される。この具体性はどこから来るのか。私は、第一詩集において(北方)の厳然たる(冬)を世に問うた高島は、むしろ自らの内奥・記憶・愛憎に従って、故郷富山を具体的に対象化することを試みていると考えるのだ。

固有名詞の使用によって舞台は富山であることが限定された。上野発の列車に乗って東京を後にした「僕」。その「僕」は、上野駅との比較の中で故郷の「停車場」を「古風」だと言いつつ、「まがった針の柱時計」や「朽ちた四角柱」、「こわれた窓の窓ガラス」に懐かしさを感じている。そして、「僕」は自分自身のことを「帰郷者でもなく成功者でもなく」、「一介の行きずりの旅の男」だと規定する。知り合いのいる場所を避け、ひとり「雪道を山麓の方に向けてとりたいと思う」と言い、「今日はせめて夜中まであの山麓の雪道でもあてどなくさまよい歩いてみよう」と感じ入る。

この詩において「僕」は故郷に対して「帰郷者」「成功者」という意識を持っていない。むしろ、ひとり「雪道」を歩く「旅の者」、つまり「歩行者」としての自己を見出ししている。人から離れて、故郷の(冬)を歩行する東京在住の富山県出身者。東京と富山という二つの空間によって二重にアイデンティファイされた存在は、同時にどちらの土地にも自身の居場所を見出せない宙づりにされた存在でもある。題名にある「挽歌」とは、富山に生まれながらも富山に「帰郷」することができない者として規定された「僕」

自身を葬る告別の歌を意味するだろう。「僕はこの若き日の詩篇を愛するがゆえに憎む」というサブタイトルは、愛憎入り混ざる「若き日」の自己との決別の意を含むと解することも可能だ。

ところで、故郷には二種類ある。一つは事実としてその人が生まれ育った場所である。戸籍や履歴に従って規定された故郷のことだ。もう一つは人が自ら主体的に決定していく故郷だ。必ずしも生まれ故郷でなくとも、後天的に選択された故郷意識のことである。そのことを考えると、この詩の中の「僕」は、生まれ育った故郷富山すらも「帰郷」の対象とすることができずにいることが分かる。換言すれば、故郷富山を「ふるさと」として選択するだけの理由が自身の中に見いだせずにいる、ということだ。あるいは、東京での「成功者」でない自分は故郷に対して凱旋できないという負い目を感じていることから、富山を「故郷」であると規定することができずにいると考えることもできる。

「せめて」、雪道をひとり夜中まで、あてどなくさまよい歩くことが「僕」にとつての慰めであるならば、この歩行は、故郷富山と東京の両方から脱落しそうになつてどこにも帰属することができないと感じるひとりの人間の姿を描いていると言えるだろう。同時に、「僕の生まれた町だ」というのはあの雪の中の灯だけでけっこう」という最低限かつ謙虚とも言える認識の中には、「生まれた町」が存在することの確認によって自分というものの根幹をとらえ直し、さらなる「旅」の途上へと向かう静かな納得と、まだ明確な形こそ持っていないが、来るべき出発への助走を讀み取ることもできるだろう。

「めったにあるものではない」「重ったい空気」を含んだ「鋭い山脈」、つまり故郷富山の持つ希有の暗さとそこに降る雪の冷たさは、「僕」の孤独な歩行をひそかに後押ししている。

## 七 まとめ

〈冬〉が我々にもたらすものは何か。そのような問いのもと、この文章は書かれ、高島高の詩は読まれた。

今回、『北方の詩』、『山脈地帯』という二つの詩集の一部作品を取り上げて〈冬〉について考察した。『北方の詩』は厳然たる自然の創出が目指され、まるでひとつの揺るぎない風景画が描かれたと言ふことができる。そして、高島が詩壇から注目されるに至ったこの第一詩集が、東京の出版社から刊行されていることからうかがえることとして、高島が都市生活者から見た北方としての富山を意識して、きわめて抑制された表現で厳しい寒さや暗い風土を現前させたということが挙げられる。また、モダニズムの手法を用いることによつて、故郷というあまりにも近すぎる対象と適度な距離を保つことが可能になり、それが『北方の詩』の研ぎ澄まされた世界を構築することに役立ったことについても言及した。

さらに、『北方の詩』が風景画だとすれば、『山脈地帯』は人間の劇が具体的に描かれた物語性に富むことについても指摘した。特に、具体的に東京、富山を示す地名が詩の中に出てくる作品においては、二つの土地に挟撃された近代人独特の孤独や葛藤が包括されており、作中人物の心のひだもまたより複雑なものとして描かれている。

高島は、『北方の詩』によつて示した〈冬〉の景色の中に、『山脈地帯』においては人間の内に流れる血のぬくもりを付与したと言える。今回取り上げた二つの詩集を読んだだけでも、高島の詩人としての技法の豊かさを知ることができ、かつ詩集ごとに表現の方向性を統一、選択する知的な判断が働いていることを感じることができ。

高島高、たしかに〈冬〉の詩人である。

1 若き日に詩を井上靖が詩を書いていたことについては、多くの研究者が触れている。福田宏年の『井上靖評伝覚え』（集英社 一九七九年九月一〇日）、近藤周吾の「井上靖と源氏鶏太（一）」富山 詩壇における邂逅を中心に（『富山文学の会 第四回ふるさと文学を語るシンポジウム』報告書「富山文学の会編」二〇一三年三月三日）などがある。

2 「詩と詩論」第三冊（昭和四年三月七日発行）に載せられた北川冬彦の「新散文詩への道―新しい詩と詩人―」には、「語と語。句と句。行と行。これららがつちり結合される。煉瓦のやうに、セメントは強くきかせなければならぬ。プランは、幾度、変更されてもいい。」の箇所がある。また、旧来の詩に対して、「新しい詩の構成法がきびしく追究されれば、追究されるほど、無闇に行をかへ、連を切ることの必然性が失われてくる。そして外観は、散文と殆ど異ならないものとなる。ここに真の自由詩への道の鍵が藏はれてゐるのである」という立場から批判を加えている。

3 立野幸雄『越中文学の情景』（桂書房 二〇一三年十月）

4 高島高編「文学組織」第二号（昭和二十二年十二月二十日）の「編集後記」には、編集者である高島の近況や時節に応じて感じたことが断章風に書かれており面白い。「冬」に関する記事も多く、高島の季節に対する感性を身近に感じる事ができる。「もういよいよ冬だ。北アルプスは日増しに白蠟色の冷感を深めてゆく。立山の頂上にはだよう雲は毎日、雪が髣髴とす。」などの記述を読むと風土の像が髣髴とす。

5 伊勢功治は『ふるさと文芸―あゆみと高島高』（滑川市教育委員会『ふるさと文芸』編集委員 平成二十五年三月）の中で「北方の詩」について触れ、その独自の生命観について言及している。また、「この詩に描かれたものは新しい山景の発見であり、言語によつて構築された詩人の

精神世界です」と評価している。他、多くの評言が『別冊  
焰のように生命燃やした詩人 高島高』(立野幸雄編集  
高嶋修太郎発行 桂書房 二〇一三年一〇月一五日)にま  
とめられている。

6 『北方の詩』(ボン書房 昭和十三年七月一日)の「序」  
において北川冬彦は、高島高のことを「新詩壇には稀に見  
る男性的詩人」だと評している。

7 成田龍一は「都市空間と『故郷』」(『故郷の喪失と再  
生』青弓社 二〇〇〇年五月三一日)の中で、「故郷の概  
念の成立は移動がおこなわれることによって始まる」とし、  
故郷というものが「事後的に、自分が移動した後に発見さ  
れる」と論じている。また、「しかし何回も移動をくりか  
えし故郷の概念が形成されてくるなかで、必ずしも出发点  
が故郷になるとは限らない」とも論じている。

# 坂口安吾と富山

近藤周吾

## 一

### 一枚の写真

ここに一枚の写真がある。大雪の積もった雨晴海岸で撮られた一ショットである。

それは下半分が雪の積もった白い海岸、上半分の下部が白い波飛沫をあげる海で、上半分の上部は分厚い雪雲に覆われている。やや明るい一点を除いて。そしてその一点、つまり時計でいう三時の位置から中心よりやや上のところに位置する一点へ向かって細いリボンのような陸——人家が非常に小さく並んでいる——が伸びて行き、最後は水天彷彿する辺りへ吸い込まれるように消尽するという、絶妙な構図によって捉えられたものだ。

キャプションは、こうだ。「冬の日本海。富山縣伏木の外海である。この日はこの地方特別の高潮で、波が路上を洗い通行一時杜絶した。その直後の海である。昔の冬の日本海はいつもこうであつたが、終戦後は波静かで、こんな荒れは珍しくなつた。(安吾)」

富山県民なら知らない人はいない名所なのだが、高岡市北部に位置する雨晴海岸は、浜から眺める岩礁と富山湾越しに見る立山連峰の雄大な眺めが美しく、能登半島国定公園に含まれ、「白砂青松百選」「日本の渚百選」などにも選ばれる絶景スポットである。古くは万葉の歌人・大伴家持がこの風景をこよなく愛し、多くの歌を詠んだ。また、源義経が奥州へ落ちのびる途中、にわか雨の晴れるのを待ったという「義経岩」があり、地名「雨晴」の由来となつたとの言い伝えもあるところである。

キャプションを書いたのは、「(安吾)」とあるのだから、紛れようもなく坂口安吾。一九五五年一月、最晩年の坂口

安吾が、大雪の中、『中央公論』の連載『安吾新日本風土記』の取材でここを訪れたときに撮られたのがこの写真なのである。

『安吾新日本風土記』の初回は宮崎(二月号)、二回目富山と新潟(三月号)だった。三回目の高知でも取材は行つたものの、二月十七日の作者の急死によって掲載は中断された。なお、八月号から大井廣介「ひろすけ新日本風土記」が安吾の遺志を継いだわけだが、どうしたわけか、この事実はあまり知られていない。

先の写真は「富山の薬と越後の毒消し」が掲載された『中央公論』(一九五五・三)と、坂口安吾『狂人遺書』(一九五五・三、中央公論社)に載っている。前者にはグラビアのページがあり、富山や新潟の写真が載っている。先の写真の下には、昔の千石船の模型と一緒に千石船の最後の船長の写真も載っているし、ほぼ近代化されている富山の製薬工場の全景および内部の写真も掲載されている。本文中にも売掛帳の写真が添えられている。

坂口安吾は不思議と写真に縁のある作家で、大袈裟に言えば、よい写真を引き寄せる魔力のようなものを持つていた。林忠彦の撮つた「バーブルパン」での写真や、乱雑に散らかつた書齋での「ショットはとりわけ名高い。その撮影の経緯については、「机と布団と女」(二九四八)に詳しい。安吾は林忠彦だけでなく、濱谷浩にも撮られている。むろん、被写体としてだけでなく、林忠彦が使つていたカメラに触発され、本人もローライコードを愛用していた。最晩年に生まれた長男・坂口綱男氏は、そのローライコードのフアイندرを覗いたことを最初のきっかけとして、カメラに興味を持ち、現在は写真家になつているのだから、やはり不思議な因縁を感じざるをえない。

### 中村正也

雨晴海岸で撮つた先の一枚は、しかし、安吾が自身で撮



ったものではない。中村正也が撮ったものである。

『中央公論』をよく見ると、「監督 坂口安吾 撮影 中村正也」とある。坂口安吾『狂人遺書』には「装幀 三雲祥之助 写真 中村正也」とある。つまり、カメラマンは、あの中村正也なのだ。それにしても、グラビアページにわざわざ「監督」と記してあるのはなぜなのだろう。

中村正也は、一九二六年横浜生まれの写真家。読売新聞写真部出身、世界映画社、映画スター社等を経て、一九五五年フリーランスとなる。一九五七年には第一回日本写真批評家協会新人賞、一九六六年にはニューヨークアートディレクターズクラブ写真賞などを受賞している。主な写真集に『NOUS JAPONAIS』（一九六〇、フランス、ブリズマ社）や『エマヌード イン アフリカ』（一九七一）がある。『神から盗んだ熱い裸』というキヤッチコピーを掲げた後者『エマ』では、杉本エマという日本の一流モデルをアフリカの大自然に投入し、アフリカの動物や現地人と彼女の白い裸身を灼熱の太陽の下に据えている。中村自身の言葉を引けば、「原始そのままの姿を見せるアフリカの大自然に、土臭さと同時に現代の呼吸を持った女を解き放してみたい……』という動機に発した仕事だった。そもそも「グラマー」という言葉は玉田頭一郎によるものだが、それを石田正子をモデルにした一連のグラマーフォトに高めたのは中村正也である。写真家・中村立行は「われわれが撮っていたヌードは死物だったと思った。ところが彼は女に生命を与えた。この功績はすごいね。」と評している。

（『アサヒカメラ』増刊、一九七九・七）

『アサヒカメラ』増刊（一九七九・七）に、中村正也「1955年・坂口安吾」として安吾の写真が四枚掲載されているが、富山の写真はここがない。「富山の毒消し部落で」とキャプションにはあるが、「毒消し」とあるので「富山」ではなく「新潟」の誤植である。『昭和写真・全仕事SERIES・8「中村正也」』（一九八三）にも、「坂口安吾の旅」

として五枚の写真が掲載されているが、富山の写真だけがない。これは気に入った写真がなかったという可能性もあるが、被写体としての安吾が写り込んでいないからだと思われる。ただ、写真だけでなく、取材の様子を回想している文章が載っていて、参考資料となる。

《安吾さんとは年齢もかなり離れていたが友達付き合いをしてもらえたのは、私の方向が文学とは全く違ったからであろう。その違いによって彼が安心して私と話ができたのではないかと思う。安吾さんの取材の仕方は、運転手、一ぱい飲み屋のおかみさん、宿の女中さん達に、きさくに話しかけ、話を引き出しながら進めていく。身近に肌につれるものから、段々に核心に入っていく、独特の文章を創っていくという具合であった。私のもの見方は、文学的ではなく、そこにあるものはあるものとして率直に見るというものであったが、安吾さんのそういう取材に伴い、写真の上でもシャッターを押すまでの過程の重要さや、捉え方、見方について私なりに吸収することが多かった。》

「監督 坂口安吾」と記してあった理由は、「シャッターを押すまでの過程の重要さ、捉え方、見方」についての何らかの示唆があったからとは考えられないだろうか。「この時期、あらゆる被写体を経験したことは、僕にとつて大きな収穫であった。一回一回の本番が新しい勉強の場で、その経験が次の仕事への裏打ちとなつて自信が生まれてきた。」（「自叙伝」同書所収）とも言っている。

同書の巻末には中村正也の年譜も載っているが、ここにも安吾についての証言がある。

《安吾さんは汽車に乗っても眠らないで景色とか人の動きをじつと見ていた。酒もあまり飲まないでね。顔の分析がくわしくて、よほど興味があったようだ。目的地に着くと、朝市に出かけていって、土地の人の食べているものを調べたりして、生活を分析して、自分の感じたことをメモする。資料調べも綿密だったけど、取材部分の方が多い感じだった

たね。素朴な多くの質問にぶつきらぼうに答えてくれて、非常に仲がよかった。安吾さんは写真嫌いだったから無理に撮らなかつた》

## 全集の年譜

というわけで、坂口安吾は最晩年に中村正也を伴い、富山県にやってきたのだが、このときは坂口安吾の研究者にとつて自明というわけでもないようだ。というのは、『坂口安吾全集 別巻』(二〇一二)という、刊行が遅れに遅れ、しかしその分、充実を極めたはずの年譜でさえ、《一九五五(昭和三〇)年

一月中旬、新潟、富山を取材旅行。》としか書かれていない。念のため、全集の編集に当たった七北数人『評伝坂口安吾 魂の事件簿』(二〇〇二)も見るが、事情は変わらない。安吾晩年の研究は総じて遅れているが、責任の一端は富山県の研究者にもあるだろう。拙稿「富山の文学―文学とサブカルチャーの『両輪駆動』」も、安吾を逸している。これではいけないと考え、知っている情報をここで補足しておこうと思う。

## 二

## 結論

結論からいえば、こうだ。

一九五五年一月一日午後、高岡市を訪れ、伏木を視察、高岡駅前の延対寺旅館に泊まり、『北日本新聞』の取材に応じ、一二日に富山市の広貫堂などを見学した。同行は編集者の竹内一郎、カメラマンの中村正也、案内人の堀田くこの三人である。以下、傍証を記す。

## 北日本新聞

日付には、『北日本新聞』(一九五五・一・一二水曜日朝刊、七面)に掲載された「熊の胃は精神的に効く、作家の坂口安吾氏高岡へ」というインタビュー記事により、特定した。この記事自体は、すでに若月忠信『坂口安吾の旅』(一九九四)などが紹介済みなのだが、十分に知られていない現状を踏まえ、ここにインタビュー記事の全文を引用しておく。(写真は省いた。)

《作家の坂口安吾氏(四九)は中央公論に連載する「安吾新日本風土記」の資料<sup>レ</sup>市<sup>ウ</sup>集のため十一日午後雪の高岡市をヒョッコリ訪れ、同市伏木方面を視察のち同市延対寺旅館にくつろいだ<sup>レ</sup>が、つぎのように「安吾巷談」をおこなつた。(写真は語る坂口氏)

◇：ぼくは新潟生まれだからこのくらいの雪にはおどろかぬ。富山へきたのは別にどうい理由もないが、この前宮崎へ行つたとき広貫堂の広告があつたので富山へきたくなつた。熊の胃はぼくには精神的に効くよ。富山の知人では堀田善衛ぐらいで、同氏のお母さんを頼つてきた。

◇：ぼくは相撲が好きで三根山関とフグを食べた時から死なばもろともというわけで友人となつた。人格者ですよ。◇：一般にぼくを酒飲み、ヒロポン中毒というが、酒はいまでも飲めばいくらもやる。ヒロポンというのはまったくウソでアドルムを書くために飲んでる。これでも身体がいいから新潟中学時代からスポーツ万能選手だつた。インタミドルで南部忠平、織田幹雄と争つて優勝した記録があるんだ。もつとも雨のためだつた。》

## 気候

実はこの記事の隣には、「二十三戸に浸水 伏木、新湊に大浪」という記事も載っている。

「十一日未明から富山湾一帯に高浪がおしよせ、とくに伏木海岸は二十数年ぶりの浪害を受け、新湊でも相当の被害があった。」

伏木国分地方は満潮時の同日午後四時ごろから三メートルの大波となり、約二メートルの防波堤を越えて旧氷見街道になだれこみ三戸が床上浸水、家族は付近民家に家財道具とともに避難、流出のおそれのある家屋にはロープをかけ、地元消防団員が出動警戒した。玉川海岸のボートが流されたり、国分玉川の両海岸の松苗造林三町歩が冠水したという。同様の記事は『北陸新聞』にも見える。

このような大荒れの日に安吾は雨晴海岸へ行つたのであるが、日本海の荒海が似合う、いかにも安吾らしい逸話と言えるだろう。

## 延対寺旅館

高岡駅前の延対寺旅館に宿泊したことも、『北日本新聞』の記事によって明らかである。延対寺旅館は現在、宇奈月温泉に移転し、延対寺荘というが、ここに今も安吾の色紙「古城の下にすみ歡樂をひさぐ 安吾 延対寺さんえ」(『坂口安吾全集16』所収)が現存している。(現物確認済)

当時、安吾を迎えた大女将の延対寺章子さんは「文士らしい風格があった。旅館の名の由来を尋ねられたことが懐かしい」と証言している。(『越中文学館42 坂口安吾 富山の薬と越後の毒消し 先用後利の力見抜く』『北日本新聞』二〇〇八・八・一八朝刊↓『越中文学館』二〇〇八)

ちなみに、子煩悩な安吾は、宿でくつろぐと、綱男ちゃんへ電話をかけてならわした。坂口三千代、中村正也、竹内一郎が揃ってそう証言しているので、安吾は延対寺旅館からも電話をかけていたはずである。

## 堀田くに

富山で案内人を務めた堀田善衛の母の名は、くに。作家

・堀田善衛は、婿養子の堀田勝文と、堀田くにの間に生まれた三男である。

堀田くには、一八八八年、伏木の廻船問屋・堀田善右衛門の娘として生まれた。鉄道や道路の発達に伴い、家業は傾くが、二十代には伏木婦女会会長に就いている。

船荷を運ぶいわゆる女仲仕たちは、雪が降る日でも我が子を港の倉庫の軒下や石炭山の間に一日中置き放しにせざるをえない重労働であったが、それを見かねたくには、一九二三年、伏木一宮の念仏堂を借りて無料で子供を預かりはじめた。そして一九二六年、富山県で初の託児所である伏木託児所を開設した。

現在の伏木保育園には、くにの胸像がある。「くに胸像」が保育園の入り口にあり、道路沿いからもよく見えます。託児所は婦人たちが自力で田んぼを埋め立てこしらえたもので、その様子を表現した土木作業のレリーフもあります。」

(萩野恭一「伏木・堀田文学散歩に参加して」二〇一三)一九四二年に厚生大臣表彰、安吾が来る前年の一九五四年には藍綬褒章を受章している。一九六四年に勲五等宝冠章受章。一九八五年没。

安吾はくににも色紙を残したようだが、現物は未確認。

「安吾新日本風土記」富山の薬と越後の毒消し」取材メモ」に「哺育所の発達」とあるのは、案内人・堀田くにの影響があったかもしれない。

## 竹内一郎

竹内一郎は、中央公論編集部の編集者。竹内一郎「書かれなかつた安吾風土記(高知県の巻)」(『中央公論』一九五五・四)が取材の様子を証言している。

《連載「安吾新日本風土記」の第三回目に『高知県の巻』を執筆するはずであった。そのために坂口さんは、去る二月十一日から四日間、カメラマンの中村正也さんと私を伴って高知縣下を旅行した。だが、なんということであろう、

坂口さんは、桐生の自宅に歸つたその翌翌日、二月十七日の朝、突然脳溢血のために亡くなられてしまつたのである。≪「安吾新日本風土記」の取材は、坂口安吾、中村正也、竹内一郎のトリオが行つていたのである。富山ではこのトリオに堀田くにかが加わつた。

≪坂口さんが、この仕事の第一回目に日向を選んだのは、坂口さん自身≪高千穂に冬雨ふれり≫で書いているとおり、坂口さんの舊友中村地平氏が宮崎の圖書館長をしているのでいろいろと便利だつたからである。またその南の果ての旅先で「クスリは富山の廣貴堂」の看板をみつけた坂口さんは、遅しい行商の足の本據地を訪問したいという意慾に驅られて第二回目には≪富山の薬と越後の毒消し≫を選んだが、その取材旅行の旅先きは、坂口さんにとつて「縄張りの内とそのすぐ隣り」であつた。そのうえ同行する私にしても、坂口さんの令兄が新潟日報社の會長をしておられることや、富山には作家堀田善衛さんの生家があつて、母堂が健在であるということなどは、心強い限りであつた。それでもなお坂口さんの満足できるような取材はできなかつたのである。≫

堀田くにかを頼りにしていたことがよくわかる。

### 美人論／写真論

話は横道へ逸れるが、安吾が高知で美人論を展開しているから。ミス高知の小学校の先生と出会つて「ああいうのが本當の美人というものだ」と一番喜んでいたという。

≪「気取りのない、おごりのない、健康な、そのままの姿。たとえ少々目鼻がゆがんでいたとしても、そこに本當の女的美しさがあるんだ。また寫眞を撮る場合でも、特別の衣裳を着て、ことさらにポーズをつけたりするのは愚劣極まりない。たとえどんな美人をモデルにつかつて、着なれない野良を着せて田んぼに立たせても、どこに美しさがあるだろうか。農婦は農婦であることが美しいし、農婦の美

しきは農婦にしかありえない。中平さんが、もし明日でも都會の女になつたとしたら、その装いがいくら洗煉されても、おれのいう意味での美しさは消えてしまふのだ」はにかみやの坂口さんは、ろくにミス・高知とは話もしなかつたが、これがその日私の聞いた坂口さんの美人論であつた。≫

しかし、これは美人論というより、写真論だろう。私には修業時代の中村正也に向けられた写真論であるように思われてならない。實際、中村正也撮影「作者亡き安吾風土記」(『中央公論』一九五五・四)にそのミス高知である先生の写真があるが、中村正也は安吾の言う通りの美人に撮つている。外で、子どもたちに囲まれる中で歯を見せて板書する先生の笑顔には、わざとらしさ、不自然なところが無い。監督安吾が長生きしていたら、中村正也の写真をどう評し、料理したことだろう。

### 大井廣介

もう一つ道草をするが、中村正也は安吾没後、大井廣介の連載「ひろすけ新日本風土記」にも帯同している。

ただし、初回の佐賀県の巻の撮影は渡部雄吉。ここで安吾&中村の撮つた高知美女と、ひろすけ&渡部の撮つた佐賀美人の写真を比べてみるのも一興か。安吾は「監督」を名乗つたが、ひろすけは「説明」となつている。

大井は「ひろすけ新日本風土記」という題に難色を示したというから、安吾の構想をそのまま引き継ぐことができたとはいえないと思われる。安吾が富山と新潟をまとめて相手にしたり、南国と北国を交互に行き来しようとしたらしていたスケールⅡ振幅の大きさに比べると、大井からはどうしても小ぶりな印象を受けてしまう。

とはいうものの、中村正也の写真は相変わらず冴えているし、大井も安吾の遺志を汲もうと努力していることは認めてやらなければならぬ。ひろすけ新日本風土記(佐

賀縣の卷)名護屋の秀吉と有明灣干拓(一九五五・八)には「感傷旅行」の四字があり、安吾の家系の発源地である佐賀を選んで行く大井の気持ちに同情すべきだ。

そこで、坂口安吾と大井廣介の二つの新日本風土記を合巻し、中村正也の写真も添えて刊行することを提案してみたい。どこかに目利きの出版人はないものか。

## 安吾の文章

話を戻そう。

結局、一九五五年一月一日火曜日の荒天下での取材を経て、安吾は「富山の薬と越後の毒消し」における雨晴海岸の描写を次のように完成させるに至った。

《私が富山へ行った日は、この地方でも珍しい荒れであった。吹雪のために汽車もおくれたほどだ。終戦後、日本海は荒れることが少なくなったが、この日は海が大荒れで、私たちは伏木港外の雨晴という海岸へ義經の古蹟を見に行くはずであつたが、海岸の路上に波がうちあげるために一時は通行ができなかつた。その荒波がしずまりかけて、どうやら通行できるようになつたころの風景がグラビヤにのせた日本海の寫眞である。

伏木港外の日本海だ。伏木は裏日本では新潟をしのぐ良港である。しかし北鮮や樺太との航路を失つた現在では全然開店休業の寂しさで、港には一隻の船の姿も見出すことができない。その寂しさは新潟の港も同じことである。北鮮と樺太の航路がなければ用のない港なのだ。一隻も船の姿がなく、クレーンは動かさず、人影すらもない港の風景というものは、まことにやりきれない寂しさに充ちられているものだ。満目死の色である。戦前は軽く六尺は積つた雪が戦後は一尺すらも積らなくなつたというが、それに反比例して生氣の失われた裏日本であつた。

「この旅行は侘しすぎるね」

私たちの旅の足は重かつた。こうして重い足をひきざり

ながら、豫定にしたがつて越後の毒消し部落へ向つたのだが、氣持は減入るばかりで、明るさを考えることができなくなつていた。

「せめて食うことだね」

私たちはどの宿でも日本海の鱈場ガニを注文した。また鱈の子の吸物に舌つづみを打つた。冬の裏日本は美食にみだされている。今晚はあれが食いたい、これが食いたいと、せめて私の考えているのは食べ物のことばかりであつた。《ここでは伝記研究の範囲を越えてしまふので精緻な分析や解釈は差し控えるが、いずれ「富山の薬と越後の毒消し」については稿を改めて論じたいと思う。》

ただ、安吾が中村正也の例の一枚を引用しているという事実だけはここで確認しておきたい。中村の写真を安吾が演出し、安吾の文章を中村が補つているというふうには私に解してみたい。安吾はそのようなグラビヤ時代の新しい紀行文のスタイルを模索していた、と。

要するに、『安吾新日本風土記』は、全集のような文字だけで読むのではなく、初出誌に戻って、いわば現地へ行ったつもりで読むのが本当だという、ごく当たり前のことを述べているに過ぎないわけだけれども、とはいっても遺著であり編集者の証言もあり、つまるところ安吾の執筆の現場がありありと見えてくる特殊なケースでもあるだけに、あえてそのような自明のことを言ってみるまでである。

さらに踏み込んで一言だけ付け加えると、安吾は若い写真家の撮つた雨晴の写真に(ふるさと)を見ていたのではなからうか。

荒れた海や空(自然)と、存在感の乏しい船や家(人間)というコントラスト。海を介した交易が無くなり、堀田善衛の祖先の廻船問屋は廃業してしまつた。戦後の日本海は最も寂しい場所に変わり果てた。しかも、それは安吾の最初期の「ふるさと」に寄する讃歌から変わらざり貫して抱き続けてきた一枚のタブローでもあつた。

## 史料

蛇足ながら、この文章の冒頭の方に「戦争前にふと古本屋の店頭で、「富山売薬業史資料集」という三冊つづきの本をみつめて、特別の必要があるわけでもないのに買いたいもめたこともあった。もつとも先年税務署に本を持って行かれてしまったので、いまは手もとにない。」とあるが、「富山賣薬業史資料集」とあるのは正確には、高岡高等商業學校編纂兼發行『富山賣薬業史史料集 上巻・下巻・索引』（一九三五・三）である。巻頭には安吾も実見したのである。廣貫堂所蔵の「反魂丹」の扁額の写真と箱書が掲載されている、分厚い三冊本だ。当時は売薬についての文献資料がかなり少なかったため、この史料集が手もとに残っていたら、どんな作品になっていただろうかと惜しまれてならない。

とはいっても、坂口安吾が、『風俗越中売薬』（一九七三）や『反魂丹の文化史』（一九七九）の玉川信明より早く、売薬ルポルタージュの分野に先鞭をつけたという事実は揺るぐことがないはずだ。

## 魚津

最後にもう一つ蛇足だが、実は坂口安吾が富山を訪れたのは、これが最初ではない。一九三四年八月、魚津に滞在したことがある。しかも一か月間も！

『坂口安吾全集別巻』（前出）の「年譜」にも記載がある。

《七月末、皮膚病がまだ治りきらず、友人たちに松之山温泉へ湯治へ行くと言って旅に出るが、結局松之山へは赴かず、八月いっぱい富山県魚津の旧友の「貧乏寺」に滞在

する。》  
この根拠は、『紀元』（一九三四・九）に寄せた「無題」である。

《K君。

御便り越中魚津の貧乏寺にて拝読。当所は旧友の今は行ひすました草庵であります。八月一杯滞在。九月にこの坊主の紹介で黒部山中の酒造家へ草鞋わらしをぬぐ予定です。頃しも酒のなんとやらいふ季節であります。さういへば流浪の饑別にと君から貰った酒盃、君の店で最も高価な珍器といふ御自讃であつたが、坊主の意見によれば名古屋製のまがひ物の由、黒部山中の清酒にはちと向きかねるといふ辛辣な眼識でありました。》

若園清太郎『わが坂口安吾』（一九七六）には「昭和九年の七月末のこと、安吾は東京を立つて北陸地方へ放浪の旅に出た。先ず松之山温泉へ行く、と彼は友人たちに言っていたが、予定を変更して富山県の魚津へ行っている。」とあるいは「この寺の坊主は安吾の旧友で、気兼ねなくこの寺に永逗留した。」などの記載が見える一方、「安吾という男は話上手で、時々、ダボラを吐き、大袈裟にものを言つて人を煙に巻く癖がある。」とも書いてあるので、どのくらい信憑性があるのか、判断に苦しむところがある。

『紀元』へ原稿を送っているところを見ると、ダボラとも断定し難いが、現地調査するにしても、当時の書簡が発見されるなど、もう少し手がかりがほしいところである。

## 【参考文献一覧】

- ・高岡高等商業學校編『富山賣薬業史史料集』上巻・下巻・索引（一九三五・三）
- ・「熊の胃は精神的に効く」作家の坂口安吾氏高岡へ」（『北日本新聞』一九五五・一・一二）
- ・坂口安吾「安吾新日本風土記」（『中央公論』一九五五・二、三）

- ・坂口安吾『狂人遺書』（一九五五・三、中央公論社）
- ・竹内一郎「書かれなかつた安吾風土記（高知県の巻）」（『中央公論』一九五五・四）
- ・大井廣介「ひろすけ新日本風土記」（『中央公論』一九五五・八）
- ・中村正也『エマ ヌード イン アフリカ』（一九七一・九、平凡社）
- ・玉川信明『風俗越中売薬 角風船・柳行李と共に』（一九七三・六、巧玄出版）
- ・『アサヒカメラ』増刊「われら写真世代35年 カメラが描いた戦後風俗史」一九七九・七）
- ・玉川しんめい『反魂丹の文化史 越中富山の薬売り』（一九七九・一二、晶文社）
- ・若園清太郎『わが坂口安吾』（一九七六・六、昭和出版）
- ・中村正也『昭和写真・全仕事SERIES・8「中村正也」』（一九八三・二、朝日新聞社）
- ・京谷準一編著『伏木郷土史年譜』（一九九三・五、発行記載なし）
- ・若月忠信『坂口安吾の旅』（一九九四・七、春秋社）
- ・京谷準一編著『追補伏木郷土史年譜』（一九九五・一一、発行記載なし）
- ・七北数人『評伝坂口安吾 魂の事件簿』（二〇〇二・六、集英社）
- ・北日本新聞編集局『越中文学館』（二〇〇八・一〇、北日本新聞社）
- ・萩野恭一「伏木・堀田文学散歩に参加して」『富山文学の会第四回ふるさと文学を語るシンポジウム報告書』二〇一三・三）
- ・近藤周吾「富山の文学―文学とサブカルチャーの「両輪駆動」」（『日本近代文学』二〇一六・一一）
- ・坂口綱男「繋がる、カメラ回想録 No.4 ローライコード」

（<http://j-camera.net/kaisouroku.php?d=20121025105020>）

二〇一七年二月一日午後七時五〇分閲覧）  
 ・『坂口安吾全集』（一九九九～二〇一二、筑摩書房）  
 ※引用は、原則として初出に拠った。

## 〈子どもたちの時間〉の現代

— 山内マリコ論序説

小谷瑛輔

### 一 〈子どもたちの時間〉の近代

日本近代文学研究史を代表する名論文の一つに、前田愛「子どもたちの時間」(1)がある。樋口一葉「たけくらべ」(2)を「子供中間の女王様」として大音寺前の子ども遊びを主宰していた美登利が、酉の市のマツリをきっかけに、もうひとつのアソビの空間を迎えとられて行く過程を描いた物語」として読み解いたこの論文は、性の世界から隔てられた子どもたちの「遊び」の世界が、「遊女」の「遊」という性の世界を意味する「アソビ」の世界へと変質していくグロテスクな様相を克明に跡付けていくものであった。

たとえばそれは「アソビの化身である美登利の闊達さが、将来彼女の自由をうぼうことになる吉原の世界から提供された金銭によつて保証されているこの設定」に潜む「微妙なアイロニー」として読み取られる。これはもちろん吉原という特殊な空間に固有の設定ではあるのだが、前田は「たけくらべ」の登場人物たちを「かつて子どもでもであった私たちの原像」と述べ、論文を「大音寺前を賑わわせていた子どもたちの世界を跡かたもなく崩してしまつた見えない力の正体が、「近代」そのものであつたとすれば、それは『たけくらべ』に導かれて子どもたちの時間へと遡行する旅を終えたばかりの私たち自身が引き受けなければならぬ現在のなものである」と結び、普遍的な「近代」の問題として読者に突きつけてみせる。

これが広く「近代」に一般の問題であると言えるのは、

美登利たちが「立身出世を夢見て刻苦奮闘する明治の理想的な少年像」の裏返しである「無垢の象徴としての子ども」だからであつて、我々が生きている規範はいまだにこの立身出世のイデオロギーである、と前田は喝破しているわけだが、「たけくらべ」の持つ文明史的意義を昭和五十年代においてこの上なく鮮やかに示したのがこの論文であつたとすれば、その射程はそこから三十年以上を経た現在を生きる我々にも届いているのだろうか。あるいは、我々にとつて〈子どもたちの時間〉とは、それとは違うものになぜしているのだろうか。

一葉を意識したかどうかは定かではないが、結果的にこの問いへの応答となつているのが、山内マリコの作品群である。

短編「十六歳はセックスの齡」(3)で第七回女による女のためのR18文学賞・読者賞を受賞した山内マリコは、同作を収めた『ここは退屈迎えに来て』(4)を初の単行本として上梓、のちに映画化(5)される『アズミ・ハルコは行方不明』(6)や『さみしくなつたら名前を呼んで』(7)など、矢継ぎ早に作品や単行本を発表していく。

これら山内の作品で頻出するのは、まさに〈子どもたちの時間〉、あるいは「遊びの時間」の終焉というテーマであり、しかもそれが性の問題を契機として登場人物に訪れる。その意味では、山内作品は「たけくらべ」の現代版変奏とも言えよう。

だが、そこには「たけくらべ」とはおよそ異なる世界が、現代の社会状況に即して描かれており、〈子どもたちの時間〉の問題をめぐる、近代と現代の大きな差異も見えてくる。

作者の故郷富山が踏まえられている(8)という地方の問題や、階層の問題、性の問題、そして子どもたちの遊びの時間の問題。こうした様々な問題が輻輳する山内作品を、以下読み解いていきたい。



## 二、「十六歳はセックスの齡」

デビュウ作「十六歳はセックスの齡」で、大人への通過儀礼としての性体験への興味と嫌悪感の二律背反を描いた山内マリコは、はじめから子ども／大人の二分法に意識的な作家であつたと言ふべきだろう。

本作は、高校一年生で「一人また一人と、クラスの女子が処女でなくなっていく」状況に焦りを感じる「あたし」と友人の薫が「十六になつたらやろ」と約束するところから始まる。自慰の経験もあり、椎名という好きな男子もいる薫はしかし、男性器への嫌悪感を捨てることができず、椎名と性欲を結び付けることは否定する。性体験に近付こうとナンパを待つについても、実際に声をかけてくる男性には「キモかった」という感想しか持つことができない。薫はついに、睡眠中の夢の中の性体験や椎名のストークングを追求し始めるが、徐々に眠る時間が病的な程度まで増えていってしまう。十六歳の誕生日に全く目覚めなくなつてしまった薫は、一年間の昏睡を経て、十七歳の誕生日に目覚める。その後、二十五歳で初めて性体験を持った薫は、性へのこだわりも嫌悪感も忘れてしまうが、雰囲気が変わつて「好きなタイプというわけではなくなつていた」椎名と十年後に再会したときには、焦つて逃げてしまつたという。「椎名くんのことはいまも好きだけど、別にどうこうなりたいとは思わない」と述べた薫は、いまでも椎名が夢に現れ、そのときは「どんなセックスもかなわないくらいに幸福感で満たされる」という。

子どもが性の知識から隔てられて「たけくらべ」では、いざ性の世界へ迎え入れられると美登利は突然変貌し、それを見る正太郎も「何故とも得ぞ解きがたく」呆然としてしまつていた。いわば、子どもたちの「遊び」が大人たちの「アソビ」によつてひそかに裏付けられていたことが

暴露されていく経緯のグロテスクさを、ある種の無知こそが際立たせていたのだが、もちろん現代では、高校生はそのような無知で無垢な存在ではない。性は、「たけくらべ」のように突然それが訪れることによつて（子どもたちの時間）を破壊しつくし、大人の世界へと劇的に転換させてしまふ決定的な契機というよりは、そうした恐怖に好奇心も緋い交ぜとなつて、むしろ子どもたち自身が貪欲に知識を摂取し、その大人に隠れての窃かな試行こそが背徳的に自立の感性を育んでいくような、教育的に正負の価値をもとに帯びるアンビバレントな領域となつていく。「十六歳はセックスの齡」の主人公たちには、性体験こそが恐怖の対象であると同時に最大の関心事であり、大人になるために必要な通過儀礼であると捉えられているのである。

本作の最大の特徴は、不安に思いつつも同時に積極的に求めていたはずのその「十六歳」が、ついに薫に訪れず、まるまる一年間の空白となることで、スキップされてしまふという、荒唐無稽とも言える筋にある。その後十年近く性体験を避け続けた薫は、いわば、決意したはずの「十六歳」を回避することによつて、現実との直面そのものを回避しおこなつたのだと言つてよい。

だが、そこで回避された現実とは、果たして何だろうか。この問いの答は、逆に薫がどのような虚構を保存し得たのかと考へてみることによつて明瞭になるだろう。薫は性の領域そのものから逃げ続けたわけではない。二十五歳になつて「処女でなくなつた」薫は、「全然なつてことなかつた」という感想によつて、性を当然のものとして受け入れていくことになる。しかしその後、十六歳で体験を果たした「あたし」と薫の間には、微妙な差異が残つている。「あたし」が「なんであんなに怖かつたんだろうね」と言ふと、薫は「なんのことかわからないふう」で、話題も自然に世間話にずれてしまうのである。

「あたし」や薫は、子どもの世界と大人の世界というも

のが劇的に異なるものであることを想像し、それゆえにこそ、その境界としての性体験を大きな恐怖と好奇心の対象として捉えていた。「なんであんなに怖かったんだろうね」と「あたし」が改めて不思議に思うのは、この境界が現実にはそれほど意味など持たないものであったことに気付いたからに他ならない。「あたし」はいわば、そこに大きな意味があるのだという虚構を喪失したのである。しかし、「なんのこともだからわからない」薫は、いまだにこの虚構を維持しているようである。

薫のもう一つの特徴は、「ぎゃつぎゃと、女子高生みたいに」笑いながら椎名のことを語るような無邪気さを維持しているところにある。子どもと大人の区別——すなわち大人になったら全く違う世界が待っているという幻想——の崩壊に立ち会うことを回避することは、逆に子ども時代のみ許される甘美な世界の崩壊も免れるということでもあったらしい。現実の椎名との関わりから逃げ、目を逸らしながら、他方で「椎名くんはいまでも好き」と述べる薫は、いまだに半ば「子どもたちの時間」にまどろんでいるとも言える。

薫は、あらかじめ象徴的な意味を付与した「十六歳」をスキップし、既に周囲からは大人として見られ自分でもそのアイデンティティをそれなりに確立した二十五歳という年齢まで性体験を遅延させることよって、この意味が実現するか崩壊するかを見極める劇的な瞬間を免れたのである。とは言え、性行為が、椎名が登場する夢の幸福感にも及ばないというところに気付いてしまった薫は、結果的にはこの幻滅を知つてもいる。そして、それを知っているからこそ、薫は再びかつての椎名の思い出に執着するのである。

この作品には、二つの視点が描かれている。一つは、ここではないどこかに素敵な世界があると、かつての椎名を想像の材料にしながら夢想し続ける薫の視点であり、もう一つは、「カッコよかった」はずの椎名が、大人社会に入

ると「かつてのオーラは、まるで魔法がとけたように」なつてしまつていくことを直視する視点である。後者は前者が幻想に過ぎないことを暴き出していくのだが、この二重性によつて、前者のように幻想を維持しなければやつていけないいやせなさのようなものが描かれていると言えよう。この問題は、「あたし」と薫の両者がそれぞれの形で共有する微妙な問題でもある。「あたし」は虚構を喪失し、薫は維持している、と先には簡単に整理したが、実際のところ、ことはそう単純ではない。薫の側が幻滅とそれゆえの未練という構図に無縁でないことは今述べたが、虚構を喪失したはずの「あたし」も、「なんであんなに怖かったんだろうね」という疑問において、かつての幻想の残滓にひそかな執着を見せているからだ。

それにしても、彼らはなぜこのような幻想に執着しなければやつていけないと感じるのだろうか。それは椎名が「かつてのオーラ」を喪失してしまうような現実の酷薄さと関わると考えられるが、それならば、椎名はなぜかつてオーラを放ち、そして徐々にそれを失つてしまうのだろうか。

### 三、『さ』は退屈迎えに来て』

この点については、「十六歳はセックスの齡」のみでは十分に展開されていないが、本作を含む連作集『ここは退屈迎えに来て』の全編にわたつて描かれるのが、まさにこの問題であると言える。むしろ、他の作品は、最後に配置される「十六歳はセックスの齡」のために、全編をかけて椎名の問題を描き、準備してきたのだというこもできる。

熊代亨(註)による文庫版の解説でも指摘されているように、椎名は常に脇役として「短編集のあちこちに登場」している。「あちこち」というと椎名が登場しない章もあるように響くが、正確には、全ての章の主人公が、椎名の人生のどこかで傍らから彼のことを見聞きしていた人物

であり、この連作集は、間接的な椎名の伝記のような形式で構成されていると言える。そしてそこで描かれるのは、久々に会ったかつての同級生から「なんか椎名、縮んでない？」と思われ（「私たちがすごかった栄光の話」）、「俺けっこうモテたよ」と自慢話しても恋人から「半信半疑」の目を向けられ（「やがて哀しき女の子」）、妹からは高校卒業後の様子について「文化水準の低い田舎のあんちゃん」になってしまったと残念がられてしまう、「ゆつくりと輝きを失って」いく「普通の人」の姿である（「東京、二十歳」）。

とは言え、大人になって椎名が恋愛市場において弱者になったというわけでは決してない。「やがて哀しき女の子」では、椎名の恋人である主人公は椎名のことを「ドストライク好みのタイプではなかった」と思っているが、面倒な恋愛の過程を繰り返す氣力を失っているというところで、「些細な不満には目をつぶって」いこうと思っておき、そうした消極的な形ではあるにせよ、椎名との結婚を考えて交際している。「地方都市のタラ・リビンスキー」では、主人公のゆうこから恋愛感情を向けられ、告白されている。「君がどこにも行けないのは車持っていないから」の主人公は他の男性と付き合えないながらも椎名のことを想っているし、「アメリカ人とリセエンス」では、椎名はアメリカ人留学生のブレндаを誘ってベッドを共にしている。

しかし奇妙なことに、椎名が恋愛市場で成功しているという事実は、彼の「オーラ」を全く保証しない。むしろ、椎名の「オーラ」の喪失は、彼の恋愛市場への積極的な参入と軌を一にしているものであり、そのことこそが椎名を幼少時のような特別な「オーラ」のない平凡な人間たらしめてしまっている。子どもの世界では、性欲の絡む関係性とは無縁にただただ「カッコよく」人気があった椎名の「オーラ」が、性欲と関わる意味付けを帯びることによって色あせてしまうという逆説が、ここにはある。熊代は「椎名

を眺めていると、*「リア充」*は退屈などしないし、誰の迎えも必要ない、退屈し、迎えを求めるのはリアルが充実していない奴だけだ——そういう対照として描かれているようにも見える」と述べているが、この椎名への理解は、彼がいわゆる「リア充」として描かれている点を的確に言い当てている一方で、重要な点を見落としてもいる。大人になって「矮小な自我が見え隠れ」（私たちがすごかった栄光の話）する椎名は、幼少時代を知る者たちにとって直視が躊躇われるほどの褪色を示しているのであって、しかもそれは、椎名が性的に充足していないからではなく、充足しているにもかかわらず、むしろそれゆえにこそ生じている変化なのである。

魅力的だった椎名が性と関わることによつて「オーラ」を失ってしまうことはたとえ、*「子供中間の女王様」*であつたはずの「たけくらべ」の美登利が、遊郭に通う大人の視点を知らぬ長吉からは「女郎」「姉の跡つぎの乞食」と呼ばれてしまい、当人も性の世界に絡め取られていった瞬間に変貌を遂げて「子供中間の女王様」でなくなつてしまふことに対応していると、一応は言つてよい。そのことの悲哀が作品の軸を形成している点も、相似していると言える。

しかしもちろん、美登利と椎名は決定的に違っている。椎名は主體的に性の世界へ飛び込み、それなりに自足しているのであつて、当人が陰惨な人生を送っているわけでは全くないからだ。

これがかつてを知る女性たちから見て直視しがたい理由はむしろ、かつての椎名の幻像を維持しなければならぬと感じるほどの、女性たちの側の生の意味の決定的な貧しさにある。そして、その貧しさの感覚が現代の地方都市特有のものとして描かれているのが本作の特徴である。熊代が述べているように、この短編集は「ロードサイド小説」と呼ぶべきもので、タイトルとなつている「ここは退屈迎

えに来て」という言葉は、いずれの短編のタイトルのなかで、収録された全作品に共通する気分を表現した言葉が掲げられているというわけだが、退屈さから連れ出してくれ何者かを待ち望まざるを得ない、地方都市のどうしようもない閉塞感を表現している。「地方都市のタラ・リビンスキー」などタイトルとしても直接示されるように、この「退屈」さの問題は地方ならではの問題として明確に描かれている。巻頭作「私たちがすごかった栄光の話」では、はじめの方に「こういう景色を『ファスト風土』と呼ぶのだ」という台詞が置かれ、巻末の「参考文献」には三浦展『ファスト風土化する日本——郊外化とその病理(10)』が挙げられているように、これは作者にとつて、当時の社会的な議論を踏まえた、きわめて意識的なものでもあった。

「ファスト風土」という術語を論壇に浸透させ、郊外論再流行の火付け役となったこの新書は、シヨツピングモールやファストフードなどの大手商業資本が地方で全国均一のサービスを提供するようになって、地方の独自の産業や生活様式などが衰退していくことを批判したものだ、それによつて地方の暮らしが「退屈」なものとなったということが『ここは退屈迎えに来て』でも大きな前提となっている。

本作の主人公たちの多くは性行為に特別な意味を見出しているが、そうした性的な関係を含む恋愛市場において成功している椎名がかえつてオーラを失つて見えるという地方都市の逆説は、何を示しているのだろうか。

この構図が示すことは、次のこと以外はないだろう。退屈な「ここ」からの脱出の希望が専ら性的なものに賭けられてしまう地方都市の貧困な文化的状況にあつて、性的なもの、幻滅を伴うかもしれない現実のものであつてはならず、常に想像的な水準に保存されねばならない。椎名は、肉肉関係にまだリアリティが乏しい幼少時代には、退屈な「ここ」にいる主人公たちを「迎えに来」る資格を十全に

有した存在であつたが、女性たちと現実的な関係を結ぶ年齢になつてくると、現実を超えたところに連れて行つてくれる夢のある存在ではなくなつてしまふのである。「携帯にかかる女の子の電話にデレデレして」(「東京、二十歳。」)いる椎名は、所詮は現実の恋愛の相手ではあり得ても、それを越える何者かではあり得なくなつてしまつていく(11)。

このように見てくると、「たけくらべ」に比して、本作の描く性の問題が幾重にも屈折したものであることが明らかになつてくる。「たけくらべ」のように、近代の「子どもたちの時間」にとつて常にその背後に潜んでおり破壊的なものとして機能していた性は、本作では、希望の象徴としての役割を帯びているところから出発している。しかし、希望がそれ一つしかあり得ない「文化水準の低」さゆえに、性に与えられるべき役割は想像の中で過大なものとなり、現実を訪れる性はその期待を担いきれなくなつていく。現代の地方都市にあつて、性の現実とは、それ自身が破壊的なのではなく、耐えがたいのはむしろもとある「退屈」さ、すなわち「文化水準の低」さにほかならない。そこから目を背けるための役割を性が担いきれないという事実こそが、何より残酷なのである。

だが、地方都市が退屈なのであれば、こうした破綻を訪れる前の「子どもたちの時間」がこれほどまで輝いているのはなぜだろうか。作品に即して言えば、椎名が「オーラ」を放ち、多くの女性たちが現在の椎名から目を背けてまでもそのかつての「オーラ」に執着しているのはなぜか。そして、十年後になつても思い出すだけで「どんなセックスもかなわないくらいの幸福感」で満たされるほどの肯定的な価値が当時の椎名の属する「子どもたちの時間」に与えられているのはなぜか。

山内の初の長編小説『アズミ・ハルコは行方不明』は、この点についてより明確に描いている。次章ではこの作品

の分析を通して、(子どもたちの時間)だけが輝いている社会に対して山内が与えている洞察について検討してみた。

#### 四、『アズミ・ハルコは行方不明』

『アズミ・ハルコは行方不明』は三部構成となっており、それぞれの部や章で視点を入れ替えながら叙述が進んでいく。

第一部「街はぼくらのもの」では、まず中学時代の同級生である木南愛菜、富樫ユキオ、三橋学の三人の主人公が成人して再会するまでの経緯がそれぞれの視点から語られる。二人はグラフィティ・アートへの熱意で意気投合して、交番にあった安曇春子という家出人捜索の貼り紙の写真をモチーフにすることに決める。街中にグラフィティを残していく中で、ユキオは愛菜との肉体関係に飽き、またグラフィティへの警察の取り締まりが始まったことに恐れをなして、グループを離脱してしまう。ユキオはLINEで知り合った女子高生と会うと言って再び学を誘うが、現場に行つた学は、少女ギャング団にリンチされてしまう。

第二部「世間知らずな女の子」は、失踪するまでの安曇春子の物語である。二十六歳でようやく社員四人の小さな御問屋に就職した春子は、安月給で働かされながら上司のセクハラに耐えている。先輩女性社員のアドバイスもあつて結婚に夢を託す春子は、最近十五年ぶりに再会した小学校時代の同級生の曾我が少女ギャング団に襲われているところを目撃する。曾我が介抱したことなどをきっかけに、春子は曾我がと肉体関係を持ち、結婚の期待も託すようになるが、曾我がは音信不通となり、やがて小学校時代のもう一人の同級生、杉崎ひとみと不倫をしていることが判明する。そんなある日、春子は突然失踪してしまう。

第三部「さびしいと何しでかすかわかんない」では、第

一部の主人公たちの視点からその後のことが描かれる。少女ギャング団にリンチされた学は警察に発見されるが、グラフィティの取材や村おこし型アートイベントのオフアール方新聞社の取材や村おこし型アートイベントのオフアール来るようになり、ニュースを見たユキオも学のもとに戻ってきて、二人でイベントに携わることになる。しかしイベントが始まってみると、二人は期待と異なる寂れた様子に失望する。一方、仲間はずれにされたことにショックを受ける愛菜は、やけくそになっていたところでキャバクラ時代の先輩である今井さんと安曇春子に偶然出会う。失踪したと思われていた春子は実は、今井さんと共同生活をしていたのだという。二人から慰められた愛菜は、女同士の共同生活に加わることを決める。

この作品でテーマとして最も前景化しているのは、女性を搾取する男性への、女性からの復讐である。随所に登場する少女ギャング団は、女子高生の体を目当てに連絡を取ってくる男性の情報を利用してLINNで拡散して集結し、襲撃して金を奪うという活動を行っている。第一部では襲撃の前にユキオが女子高生を誘っている場面が描かれているが、実は第二部の曾我がも、女子高生をネット上で誘惑していた結果として少女ギャング団の襲撃を招いたことが推測される。この襲撃は、直接には女子高生を搾取しようとしたことへの懲罰として行われているが、女性一般への搾取への復讐という意味も担っている。実際、ユキオや曾我がは、女子高生を性的に搾取しようとしただけではなく、それぞれ愛菜、春子という、自らに思いを寄せる女性への姿勢も、誠実に報いようとはせず一時的に利用しようというものであつて、たとえば春子が少女ギャング団の情報を讀んでいるうちに「不思議と胸が躍ってくるのは、こうした男性一般への復讐のモチーフを感じ取っているからにほかならない。

だが、こうした復讐のテーマが現実社会の構造を転覆さ

せるわけではない。春子の場合、ギャング団が曾我を襲っているところを見た後で、肉体関係を持った曾我に惹かれていき、まさに復讐の対象となるべきはずの、典型的な捨てられた女の構図が成立してしまう。本来は「恋愛はなれしを貶める」、「セックスをしたことで曾我氏の中の自分の価値がうんと目減りしたような気がする」、「嫌で嫌で仕方なくなくなった」などと考えて曾我との関係を否定的に捉える視点を持つていたはずの春子を、曾我との結婚への執着に向かわせる圧力が、常に機能し続けているのである。

その圧力の正体は、たとえば春子に低賃金しか与えない会社であり、春子の価値を若さと結婚可能性のみに還元して捉える上司からの視線であり、「単調な仕事」や「狭苦しい人間関係」でもある。また、春子が社会で活躍できず無職でいることを「花嫁修業の一環」として暗に歓迎しつつ、家庭のルールを厭うと「春ちゃんが結婚して自分の家庭を持つたらそうしなさいね」とたしなめる家族でもある。すなわち、結婚の他に閉塞を打破する道を見出すことのできない、地方都市の文化的な貧困が様々な形で春子を結婚へと向かわせるのである。

春子は、少女ギャング団に遭遇したとき、一度「わたしも連れてって」とすがりつく。しかし、「女子高生でなきゃダメ」と言われた春子は、「その言葉に、深く深く納得して」立ちすくむ。男性を足蹴にするのに相応しいのは、すでに男性から搾取され、労働市場で挫折し、結婚出来そうかどうかという価値観に還元されて見下されてしまう春子の世代ではなく、職業による経済的な格差や都会と地方の文化的な格差にもまだそれほど晒されず、その地での性的な市場価値において最も高い位置を占める、女子高生でなければならぬ、というわけである。

それゆえ、大人の女性たちにとって、少女ギャング団という一つの（子どもたちの時間）は、いわば一瞬だけ垣間見える幻のようなものであり、彼女たちを実体的に救うも

にはなり得ない。また、このギャング団の活動自体、大勢の警察官を空想のピストルで蹴散らして「めちやくちや爽快なエピソードの場面のあと、活動を終了させてしまう。彼女たちの活動が一時的なもので終わらねばならぬのは、女子高生という一つの（子どもたちの時間）が決して永遠のものではあり得ないことと対応しているようにし、指で形を作ったピストルは、彼女たちの存在そのものがある意味で空想的なものであったことを象徴しているが、ともあれ本作では、日本社会において女子高生が持っている「無敵感（12）」に、一瞬希望を幻視させて消えてしまう一過性の幻が見出されているのである。

こうした幻に、大人である自らは決して参与できないものであることを確認した後、春子は大人としての現実的な「復讐」を模索することになる。結末近い場面で、夢うつつの中の愛菜に、春子は「仕返しなんて、しなくてもいいよ」、「女の子にはね、もつと別の言葉が必要なの」と言い、「優雅な生活が最高の復讐である」というスペインのことわざを教える。少女ギャング团的な「仕返し」とは別の「復讐」の概念が必要だというわけだが、とは言え、「今井さんはスナックに勤め、春子はコンビニでバイトしつつ、家事と瑠樹の世話を引き受けている」という現状を踏まえると、彼らが新たな形で「優雅な生活」という復讐を実現できているわけでは必ずしもないだろう。スナックでは客となった男性の機嫌を取らねばならず、コンビニのバイトでは低所得で不安定な労働者として、時には客や上司から嫌な思いをさせられることもないとは言えない。「優雅な生活」というのは、実現したものだというよりは、あくまでも目指され、模索されるべき新たな理念として示されているものである。

少女ギャング団は、彼女たちのような復讐が大人の女性にとって目指されるべきものであることを教えるのではな

く、むしろそうした〈子どもたちの時間〉的な復讐は一過性の幻に過ぎず、現実には不可能であること、別の模索が必要であることを彼らに教える存在なのである。

## 五、〈子どもたちの時間〉の現代

ところで、この作品でもう一つ重要なのは、登場人物たちを鬱屈させる地方都市の閉塞が、女性に対してだけではなく男性にも働いているという点である。ユキオと学が参加したアートフェスは、華やかなオープンングレセプションによって始まったが、「翌日からはほとんど誰もこなくなつてしまう。自治体や有名アートディレクター、地元メディアは、イベントやユキオと学の存在を華やかに扱うが、それは彼らの存在意義を現実的に保証するものではなく、イベントやグラフィティは現実にはほとんど誰も見向きもしないものに過ぎなかった。地方都市においては、きらびやかな賑わいは一過性の虚構としてしか成立し得ず、そのことに気付いた彼らは「遊びの時間は終了だ」と考え、別の仕事への就職を模索し始める。

このように見てくると、「遊びの時間」の夢が与えられ、しかしそれが醒めると退屈な現実が待つており、地味な模索へと旅立たざるを得ないという構図において、女性主人公たちと男性主人公たちは同じ問題を共有していることが分かる。

いわば〈子どもたちの時間〉とは、退屈な地方都市の現実への直面を免れ、一時的に想像の世界に遊ぶことが社会から許された「遊びの時間」にほかならなかった。主人公たちが、新たな友人たちや大人との関係に飛び込んでいくよりも、小学校や中学校の頃の同級生との関係を復活させていくのは、それしか選択肢がない地方都市の狭い人間関係を示すものでもあるが、同時に、かつての〈子どもたちの時間〉への彼らの未練を表してもいよう。〈子どもたち

の時間〉は夢のようなものである以上、一時的にであればもちろん延長することも、再び垣間見ることでも可能ではあるが、いずれ醒めなければならぬものでもあるし、また長くその中にまどろんでもあればだろう。〈子どもたちの時間〉を増してしまふものでもあればだろう。〈子どもたちの時間〉に見出される夢が楽しいものであればあるほど現実の「退屈」さは一際立つてしまう、という皮肉がここにはある。

はじめに見た通り、前田愛は「たけくらべ」を念頭に〈子どもたちの時間〉を近代化の弊害から自由なユートピア的な時間として見出し、それを破壊してしまう近代の論理を批評する視座をそこに設定してみせたわけだが、おそらくは、〈子どもたちの時間〉をそのように理想化し、現実への直面を免れる聖域として守ろうとすればするほど、そこから出ることの苛酷さは増大してしまうだろう。現代に出来た〈子どもたちの時間〉の問題とは、前田愛的な子ども観を実体化していった現代の制度が生み出した悲劇かもしれないのであり、山内マリコはそのアイロニーを見事に捉えていると言える。

乱暴に整理するならば、「十六歳はセックスの齡」や「これは退屈迎えに来て」は、子どもが大人に夢を見ていたはずが、その夢の失効によって今度は大人が〈子どもたちの時間〉に夢を見ざるを得なくなっていく逆説の悲哀を描いており、「アズミ・ハルコは行方不明」は、大人が〈子どもたちの時間〉の夢に執着してしまうがそこから突き放され、別の道を模索せざるを得なくなっていく事態を描いている、とひとまずはまとめることができよう。

なお、ユキオと学の「遊びの時間は終了だ」という感慨が、山内にとつて男性も女性も共有する問題系であることは、翌年刊行された『さみしくなったら名前を呼んで』に「遊びの時間はすぐ終わる」という、女性を主人公とする物語を書き下ろしていることから明らかであろう。ここでは、子どもが大人に見る夢／大人が子どもに見る夢は、

地方出身者が都会に見る夢や、階層の低い人間が階層の高い生活に見る夢などに変奏され、重ねられて描かれている。いずれも、一方では現実の差異でありながら、そこに投影される期待が過大であるがゆえにいつかは醒めてしまうという夢としての残酷さを孕み、人々を幻滅させ、しかし人は幻滅させられてもなおそこに執着してしまう、という構図において共通していると言える。

「遊びの時間はすぐ終わる」の構図は、『ここは退屈迎えに来て』や『アズミ・ハルコは行方不明』で「退屈」の原因として位置付けられていた地方の「文化水準の低」さという問題が、実は固有の条件なのではないことを暗示している。本質的に思えた地方の「文化水準の低」さという問題——都会／地方という二項対立——そのものが幻想に過ぎない、という新たな暴露がここでは予感されている。その視座は『ここは退屈迎えに来て』や『アズミ・ハルコは行方不明』に対して自己批判的なものであるとも言えるが、山内マリコの作品は、そのように少しづつ弁証法的に発展していくのである。

独自の〈子どもたちの時間〉の問題から出発した山内マリコは、これ以降、最新作『あのこは貴族』<sup>(13)</sup>に至るまで、この問題系をこのように様々に変奏・重層させて創作活動を行っていくのだが、その豊穡な問題系を論じ尽くすことは現在の稿者の能力を遙かに超えている。本稿は、山内マリコ作品の一端を捉えたささやかな序論に過ぎない。

(1) 前田愛「子どもたちの時間」『都市空間のなかの文学』筑摩書房、昭和五十七年十二月

(2) 樋口一葉「たけくらべ」『文学界』明治二十八年一月〜二十九年一月

(3) 「In your dreams」と改題して『小説新潮』平成二十年六月に掲載。本稿では引用は文庫版『ここは退屈迎えに来て』幻冬舎、平成二十六年四月に拠った。

(4) 山内マリコ『ここは退屈迎えに来て』幻冬舎、平成二十四年八月

(5) 松居大悟監督、蒼井優、高畑充希主演「アズミ・ハルコは行方不明」平成二十八年十二月公開

(6) 山内マリコ『アズミ・ハルコは行方不明』幻冬舎、平成二十五年十二月。本稿では引用は文庫版『アズミ・ハルコは行方不明』幻冬舎、平成二十七年十月に拠った。

(7) 山内マリコ「さみしくなったら名前を呼んで」幻冬舎、平成二十六年九月

(8) 山内マリコは本作に描かれた地方都市について「昨年出版されたデビュー作『ここは退屈迎えに来て』は／地方都市全般を舞台に描いた小説でして／執筆時の脳内イメージはもちろん富山市ですが」と「富山のみなさん、はじめまして！2013/04/24」『山内マリコの帰省日記』

[https://toyama.myl.net/mp/yamauchimariko\\_diary\\_toyama/?sid=16100](https://toyama.myl.net/mp/yamauchimariko_diary_toyama/?sid=16100) 平成二十九年一月二十四日閲覧)で述べている。

(9) 熊代亨「解説——ロードサイドのリアルな人間模様」『ここは退屈迎えに来て』幻冬舎、平成二十六年四月

(10) 三浦展「ファスト風土化する日本——郊外化とその病理」洋泉社、平成十六年九月

(11) 椎名が「オーラ」を維持するには、今度は地方から見た都会というものが持つ幻想の体現者ともなるよりないわけだが、大阪に行つて適応しきれず地元に戻ってきた椎名には、その資格はない。つまり、そもそも地方に生きる女性主人公たちから見れば、同じ地方にいる人間である時点で、退屈な「ここ」にどこから迎えに来る存在となる資格を欠いてしまつていたのである。

(12) 山内マリコ、Mami「アズミ・ハルコは行方不明」映画公開記念 無敵女子対談「女の子、Yeah〜☆☆☆」(電子書籍)幻冬舎、平成二十八年十月

(13) 山内マリコ『あのこは貴族』集英社、平成二十八年十一月付記。本稿は平成二十八年年度高志プロジェクト「若者、若手作家の感性から見る富山文学」による成果の一部である。



## 第7回富山文学の会研究大会

### 八木光昭先生講演抄録

#### 大きなテーマを三つ

富山文学と私との関係は、資料の開拓、基礎的な文献収集というところから始まっています。そして、富山の近代文学研究に少しはめどをつけています。私も富山に参りましたのは今から35年くらい前です。もともと東京生まれ東京育ちで、永井荷風の研究、耽美派の研究を中心にやっていたので、地方とは全く関わりがありませんでした。しかし、富山に縁があつて来ましてから、非常におもしろい思いをしました。私のような東京生まれ東京育ちで東京文学ばかりやっていると、見えないものがたくさんあります。富山文学を少し真面目に勉強し始めると、いろいろなこと気が付き始めます。それがすごく面白かったのです。

どういふことかと言いますと、私の研究は明治30年代後半から40年代が中心で、特に耽美派系統に関心を持っていました。ですが、その辺りのテーマで研究を進めるにあたって、直接関係ない地方文学の勉強が何かとヒントになりました。私の師匠、池田弥三郎先生も、「文学研究は自分の専門ばかりで押し通しても駄目だよ」と、よく言われていました。「具体的にどういふことですか、もう少しわかりやすく教えていただけませんか」と尋ねると、「研究者は3本の縄を持ってない駄目だ。研究の筋みたいなの追いかけていく大きなテーマを三つくらい持っていないとまっとうな研究はできないだろう」とおっしゃいました。三つの糸とか、縄がうまく撚られたときにいい論文ができてくるものだろうということですね。

魚津に来てから道楽として釣りを始めました。海釣りに

誘ってくれるセミプロがおりまして、小さな二人乗りのボートに小さな船外機を付けてまして、海に出て行きます。ボタがって、魚群探知機などの科学的な文明の利器はないわけです。彼は長年の経験によって、この場所でカサゴを大釣りしたぞ、ここでアマダイをたくさん釣ったということを書いていくのです。

ご承知のように漁師は山立てということをしします。海には目印がないので、ここは海の中のどの位置にあるのかというのを、山を見て確かめます。この点、富山県というのは便利ですね。海岸線に一本松があつて、一本松の先に僧ヶ岳の頂上が合わさる線の延長線上に自分はいらる、あるいは、一本松から毛勝岳の山頂が見える、その延長線上に自分たちはいる、というように把握できます。これは一本線だけでは駄目なのです。もう一本、別の方角で、何々の社屋のビルのでつぺんのところと後立山連峰の旭岳の頂上が一本になった線と交わったところに自分がいるということとを同時に見定めてはじめて自分の位置が確定します。よく釣れたその地点に再度来るにはその二つの線を正確に合わせるわけです。こういう風にして山立てをします。もちろん、その山立ての線が複数であれば複数であるほど、海上で非常に正確な位置が把握できるわけです。

それと同じように、さっき3本の縄というような言い方をしましたが、あるテーマを三つの視点、あるいは五つの視点からそこに焦点が合わさったときに、非常に面白いことに気が付いてくるし、焦点が合ったところのものが3次元的に見えてきます。このようなことで、富山文学を勉強することが本来の自分の勉強の進化にもつながっていったような思いがしました。

#### テキスト集め富山文庫に

私は、富山県人になつたのだから、富山県人らしく生き

よう、富山県人として死のうと思っております。そのためには、富山県というのとはどんな風土を持って、どんな人たちが住んでいるのか、その心はどんな心なのか、やっぱり知りたいわけですね。早く富山県人になりたい、富山県文学を真面目に考えてみようと思いました。

私の場合、研究対象は古典ではなく近代文学です。明治以降の富山文学をきちんと読んでいこうという思いが深くなってきました。しかし、テキストが手近にありませんでした。誰を研究しようとしてもテキストがない時代だったので、古本屋の目録や古書展覧会の目録を見て注文を出したり、地元の古本屋さんを回ったりして、手当たり次第に集めることから始めました。最初は名前や存在くらいは知っていても、どんなものなのか内容も分からずに、後々読みたくなるものだろう、必要になるものだろうという思いだけで、富山に関連していそうなものを何でもかんでも注文していました。それが積もり積もって、県立図書館に入っている富山文庫の基礎となったのです。

最初はポケットマネーで買うことから始まったのですが、洗足学園魚津短期大学の学長が見識のある方で、これは短大だけではなく富山県にとっても財産になるだろうと、予算をかなりつけてくれるようになりました。かなり充実してきた段階で、残念ながら富山文庫も洗足学園魚津短期大学の閉学と同時に収集が途切れてしまいました。県立図書館に移管ということになりましたが、県立図書館でも鋭意補充していくという約束でしたし、実際に少しづつ充実してきたのは喜ばしいことだと思います。ようやく富山文学研究ができると言ってもいいような段階になってきたと思います。しかしながら、あるテーマ、富山県関係作家、あるいは作品を深く掘り下げた研究が発表されるといって段階までは、まだ至っていないのではないかと思います。存在は知られたし、概要も分かっています。基本的に読みたいテキストは手軽に求められるように

もなってきました。さあ、本格的な研究の段階はこれからだという思いがあります。今日、お招きいただいた富山文学の会は第7回、ようやく本格的な研究がなされ始めて、7年が経っているのだなとうれしく思っています。

今日は、富山近代文学史の全体を振り返ってみたいと思います。「郷土の文化」は太田先生が中心になって発刊されている、大事な文献雑誌で、富山文献資料を知るには大変大事な資料です。「郷土の文化」に載せられた富山文学史の年表を使って、今、どの程度のことがかつてきているのかを再確認したいと思います。年代順にどのような状況か、これからのどんな視点で研究が期待されるのか、資料はどのようなものが残っているかについて触れていきたいと思います。

### 全集が完成した横山源之助

最初は横山源之助です。明治27年、県人による初の近代小説「貧しき小学生徒」、明治32年には『日本之下層社会』を発表しています。源之助に関する研究は、非常に便利になりました。立花雄一さんのご努力で、新版の『横山源之助全集』が完成したおかげです。一昔前に、明治文献の『横山源之助全集』が全5巻で企画されましたが、5巻の企画中出たのは2巻だけで、3巻は未完で終わってしまいました。2巻の既刊分というのは、単行本で出版されたものばかり、そう稀覯本でもなく、図書館で見ることができません。それまで困っていたのは、横山源之助はたくさんの著作が有りながら、それらが手軽に読めず、全貌が分からなかったことです。そのために、源之助の研究が遅れていたわけなんです。私などが源之助を調べ始めたときは、国会図書館に相当通いました。例えば「貧しき小学生徒」も『家庭雑誌』という古い雑誌からコピーを取ってござるを得ませんでした。しかし、源之助の新版の全集が出たことによって、こ

れから研究が大いに進むと思います。

横山源之助は、どういう人物なのかを一言で答えるのは難しい。よくルポルタージュ作家とかジャーナリスト、あるいは社会運動家などと言われています。しかし、横山源之助の業績の全貌を頭に入れた上で、彼は結局どんな人だったかというのをうまく説明してくれた人はまだいません。それをこれから期待したいと思います。

彼は「貧しき小学生徒」という唯一の小説を書いた明治27年（小説は9月ですが）12月に毎日新聞社に入社して、いわゆるルポ作家としての活動を開始します。明治27年12月、最初のルポルタージュ「戦争と地方労役者」を書いていきます。したがって、小説1本書いただけで、すぐにその年の暮れにはルポルタージュ作家として、新聞記者としての活動が始まります。「貧しき小学生徒」は附けたりというか、なんか異質のように感じます。大雑把に言ってしまうと、横山源之助のテーマは「貧」の研究、世の貧しさとは何か、貧しさの本質を知り、その貧からの脱出、脱却の方策を探るといのが生涯のテーマでした。その出発にあたって小説に書いてみたところでそれがどれほどのものかということだと思えます。自分の思い、それを小説に作り上げたとしても、どれだけ社会を動かせられるか、どれだけ貧者の助けになるか、そんなことを考えると、彼には面はゆい思いが募ったのではないでしようか。彼のその後の業績をたどってみると、小説家として生きていくような生ぬるさでは、彼は耐えられなかったのでしょうか。

そのルポの始まりというのは、基本的に貧民窟の探求です。彼のルポの前、明治23年8月には新聞『日本』の記者で桜田文吾が「貧天地飢寒窟探検記」を連載、後に単行本も出ています。松原岩五郎のルポも『国民新聞』に明治25年に載ります。したがって、貧民窟の探検、記録というのは明治27年に始まった横山源之助のルポの前にもあるのです。しかし、後々『日本之下層社会』にまとまるような彼の

東京の下層社会のルポとは決定的に違うところが一つあります。それは最初の「飢寒窟探検記」の題名にあるように、探検なのです。一般の人々から見るのと想像もつかないような貧しい生活をしている、その下層民がどんな暮らしをしているのか興味本位のところがあり、それで探検対象とするのです。下層民は自分たちと違う人種という思いが基本的にあります。しかし、源之助の場合は違います。穢多非人を見るような目で貧民窟を見て歩くのではなく、同じ人間として同情しています。車善七や弾左衛門とかを頭にあだく穢多非人の社会の延長として、何か閉ざされた得体的にのれない世界を探検しようというのではありません。

明治27年というのは、エポックメイキングな時代です。日清戦争が起こり、それを境にして日本の社会はガラッと変わっていきます。資本主義体制が確立されていく中で、日清戦争の前と後で明治の社会がかなり変わります。貧富の差が非常に激しくなります。源之助は、都市下層民から出発し、職人、職工、そして農民、特に小作人を下層民として着目して行くことになりました。

同じく探検興味によるもので、貧民窟を探検した記録がもうちよつと前にあります。呉文聡という人が明治24年に発表した「東京府下貧民の状況」です。これが発表されたのは、『スタチスチック雑誌』という雑誌です。スタティスチック、つまり統計学です。呉文聡は日本で初めて統計学という考え方を普及させた人です。なぜ、このことに触れるかと言うと、横山源之助は下層社会のルポにおいて統計を重要視しているのです。何人いるのか、残飯がいくらか、明確な数字を挙げて、下層民の生活状況を報告しており、非常に説得力があります。したがって、源之助の下層民のルポというのは、近代的な社会学の研究に入っているのです。興味本位の記録ではなく、志自体が違います。そんなところに留意しながら源之助の生きざま、業績を追いかけていく必要があると思います。

統計的手法などを取り入れ、社会の見方も近代的になりました。東京から地方、全国へとという視点の広がりもあります。『日本之下層社会』にまとめられたものがその最初の成果だと思えます。東京の最下層の民の研究が始まりましたが、やがて、足利や桐生などの製糸女工の貧困情勢、それから大阪のマッチ工場へと調査が広がりました。この当時の日本のマッチ輸出は非常に大事でしたが、ひどい貧困層が関わっていました。そのルポです。福井あたりの綿織物も取り上げています。

このように、彼は東京の一部分の特殊な人たちだけでなく、全国に目を向けて資本主義体制が確立されていく中で、貧困から這い上がっていかれない下層民に目をつけていきました。その辺りの大局を見据えながら、横山源之助を掘り下げていったのだと思います。

富山文庫には基本的な単行本は集めてあります。稀覯本なのは、『南米渡航案内』です。本当に珍しくて、収集している長い間の中でも、古書目録で見ただけでなく、これを手に入れた時は小躍りして喜んだほどです。源之助は晩年になって、貧民を救済する一つの手立てとして移民を考えていました。貧民が新天地に行って新しく生きる可能性に賭けようとしていました。実際に彼はブラジルまで行って調査したと言われています。どうやったらブラジルに行けて、どのような方法だったら生きていけるかをまとめたのがこの本です。

源之助に関しては研究を深めようと思えば深められる段階に來ています。

### 泉鏡花の文学性が見える富山物

次は泉鏡花です。鏡花に関しては、隣の石川県、福井県に専門の研究者が大勢います。上田正行さん、小林輝治さん等、福井大学の越野格さん、金沢学院大の秋山稔さんと、

日本近代文学会の北陸支部が置かれている金沢には鏡花の研究者が多士済々そろっています。彼らがよく言う泉鏡花の富山物は、富山関連作品というのですが、それに関する研究は今一つはかどついでません。

富山物というのは、まとまりがあり、泉鏡花の文学性を典型的に見ることができるので、そこに着目してほしいと思います。特に、富山物は大家として名が出てくる前の初期に集中しています。彼の作品作りのプロトタイプというものがほの見えると思います。それが一つの利点です。作品には富山の秘境が選ばれています。例えば小川温泉元湯、俱利伽羅峠、立山……。彼は秘境好きで、人が行くのが大変なところが舞台になっていることが多い。そういう所が富山県には多く、それも全県的に選ばれています。

そして、その作品を概観すると、何か面白い共通するものが見えてきます。例えば、泊駅から出発して小川温泉まで行くというのは現実にあることです。しかし、現実の世界から出発して、それがだんだん非現実なことに変化していくのです。距離にしても、最初は距離記述が合っています。だんだん変わってきます。そうして、自然と我々を魔界に誘い込んでしまうという手法を用います。小川温泉を舞台にした「湯女の魂」は典型的です。彼の独特の技法、現実から夢の世界へ、その典型が見えます。

彼の文学的な世界で大事なものは、その土地その土地に根付いた口碑、伝承、噂話、稗史の活用です。昔話や伝説が彼の頭の中には詰め込まれており、富山におけるそういうものが彼の富山物の中にも出てきます。小林輝治先生の研究というのは、金沢の昔話や伝説を収集し、それと鏡花文学との関連を明らかにされてきました。しかし、富山の昔話や口碑、伝説の類を広く積極的に収集したという業績は少ないですね。ですから、多少不便です。

「蛇くひ」という作品がありますが、今一番進んだ研究をされているのは立野幸雄さんだと思います。桂書房から

出た『越中文学の情景』でも触れてありましたが、彼の博士論文には詳しい論考があります。「蛇くひ」には應と博う集団が出てきます。それになぜ鏡花が着目するのかが説明は難しいと思います。もし、何か記録みたいなものが見つかれば面白いと思います。「湯女の魂」でも、小（しよ）川（せん）山（ざん）の妖怪というのが出てきます。小川温泉元湯の縁起、温泉ができた由来に小川山が出てきます。小川とは何かというと、魚津市の小川寺からで、そこから泊まで温泉が飛んできたのだと言うのです。鏡花の念頭にこれが入っていたかどうか。一般的に富山の史料や噂、口碑、伝説にどんなものが残っているか調べようとすると、資料が乏しいですね。しかし、富山物はそのような謎解きの可能性もあつて、面白い鏡花論が書けるかなと思います。

鏡花は法華経を読み込んだ人だという研究もあります。上田さんの研究には「葉草取」と法華経との関連性を掘り下げた論文があります。法華経の中に、鏡花の幻想の源泉になるようなエピソードがないかどうか調べ直してみても面白いかもしれません。

### 研究が遅れている三島霜川

さて、三島霜川は大変です。明治書院から出ている明治編、大正編、昭和編1、2の4冊本で近代文学の年表として一番詳しい『現代日本文学大年表』の明治編をばらっとめくっていくと、三島霜川の名前がよく出てきます。おそらく年表に載っている明治の小説家の中で、三島霜川は作品が3本指に入るくらい多いでしょう。すごい多作家なのですね。

ところが、総じて三島霜川の研究は遅れています。一昔前の段階で後期硯友社文学の研究というと、伊狩章さんの名前が出てきますが、伊狩さんの研究でも三島霜川のとは

ろは力が入っていません。以降、三島霜川の研究となると、真正面から取り上げられてきませんでした。

唯一例外が富山大学の旧教育学部の佐々木浩先生の研究です。確か『富山大学教育学部紀要』の昭和50年代から平成5年ごろにかけて十数本載せていらつしやいます。どうしてこれが1本にならなかつたのだろうとの思いが私にはあります。佐々木先生は、もうちよつと、もうちよつととおつしやつていました。もう少し研究が進んで、論文があつたと数本書ければ1本にまとめられるとの思いがあつたのだと思います。

研究対象とするには、いま一つ、三島霜川は魅力が足りません。徳田秋声の陰に隠れた存在というか、金沢の陰に隠れた富山みたいな感じですが。後期硯友社の中では非常に大事な作家なのに、三島霜川は二の次、三の次にされてしまっています。そうならなかつたのには訳があつて、彼の文学がそう高く評価できないからでしょうね。私から言わせれば、三島霜川は実際作家だと思いません。

実際作家というのは、その時代その時代のトピックスを作品にあえて取り上げて大方の喝采を狙います。例えば、学校でいじめ問題が騒がれ始めるといじめ問題をテーマに小説を書く。老人介護の問題が問われ始めるとそれをテーマに小説を書く。有名野球選手が薬物中毒になつたら、それで作品を書いてみようとするのです。

彼が力を入れて書いたと思われものでは、例えばキリスト教信仰の問題など、みなその当時の重要なテーマを扱っています。「虚無」という作品もそうで、ニヒリズムを謳いながら、その実、明治30年代半ばから顕著になる共通テーマである青年の悲哀を扱っています。多くの作家が悲哀をテーマに小説を書いています。そういう文学の風潮が見えてくると悲哀をテーマにして書くのです。そういう人なのですね。だから信用が置けないのです。

それから、秋声の作品の多くを霜川が代作していたら

うという代作問題があります。執筆態度に戯作者のような要素があつて、一筋縄ではいかないのです。人間的にもおかしな人だつたようです。年中お金が足りなくて、僅かな借金をするために、人力車に乗って行くなど、奇行で知られています。でもそういう噂が残るということは、何か陰に面白いものがあるのでしょうか。そういう意味でも三島霜川の文献的資料を調べていくのは大事だと思ひます。

## 投書作品が残る斉藤素影

斉藤素影という人は、ほとんど知られていなかった人です。数少ない幸田露伴門下です。不思議なことに、富山の近代文学史を見ていくと、そんなに潤沢ではないけれども、近代文学史の重要な文学潮流の中には、誰かが頭を突っ込んでいるのです。例えば三島霜川は硯友社で、『青鞥』には尾竹紅吉が、というように。

斉藤素影の資料は、亡くなられてしまいましたが、息子の斉藤悦郎さんからまとめて洗足学園短期大学の富山文庫に寄贈されました。幸いなことに、素影自体が手元にとつておいた『文庫』やその他の投書雑誌あたりから、『文芸倶楽部』まで、発表した作品の切抜きがスクラップされて残っており、それをそのまま寄贈していただきました。明治の作家ですから別号をたくさん持つていて、そのスクラップがなかったら、素影の作品と分らないものがありました。これは非常にラッキーです。これを散逸していたら、永久に闇の中に消えていった存在かもしれませぬ。寄贈していただいた中に、幸田露伴からの書簡が11通ありました。『露伴の書簡』でまとめて翻刻されていますが、露伴書簡の中で、個人で11通（全集所収数は51通）という数は抜き出しています。そういう意味でも貴重な存在です。

作品をさつと読んだ限りでは、そう大した作家とは言え

ないかと思ひます。しかし、素影を研究していくと、面白いことが分りそうだなと思ひます。この時代、明治20年代あたりから30年代にかけては、地方で文学に興味がある人物は、投書雑誌に投書することから始まる人が多く、斉藤素影もその典型です。これがもう少し詳しく分かっていると、どういう形で腕を磨き、文学技法などを身につけていったのか、文壇に出ていったのが判明していくと思ひます。ただ、資料が少ないので難しいかもしれませぬ。しかし、改めて追いかけると面白い研究テーマだと思ひます。切抜きを見ていて面白いのは、『北陸タイムス』に連載した作品があることです。新聞連載小説というのは、明治初期に、続き物と言われていました。続き物から始まって、新聞連載小説と言われるまでに定着していきます。前段階だと講談の速記ものなどが残っていますが、そのような二流三流の戯作者程度の土台や下つ端の新聞記者が書いたような続き物が新聞小説の人間や下つ端の新聞記者が書いたような連続物が新聞小説の土台や下つ端の新聞記者が書いたような連続物を載せたりする時代になっていきます。それと素影の文業は重なりますので、その辺りで改めて地方の新聞を介在したところの文学作品のあり方が分かつてくると面白いなと思ひます。

富山県の新聞のテクストは明治40年代くらいからはかなりきちんと残っていますが、それ以前に発行されたものは散逸が激しくて、なかなか研究が進みませぬ。残っている限りのものをつなぎ合わせて何か出てこないかなと思ひます。これは富山近代文学史を考えたときに、触れざるを得ないとこの道と思ひます。だいたい初期の新聞、『北陸タイムス』、『高岡新報』もそうですけど、地方紙というのは中央紙に載つた「続き物」をそのまま載せることが多い。版權がどうなっているのかはつきりしませんが、そのため、その作品がその地方、富山の文学と直接関わりがあるのかは分りませぬ。その辺りを明らかにすることは面

白いテーマで、難攻不落かもしれませんが、やる価値はあると思います。

## 資料が充実している井上江花

井上江花は面白いですね。井上江花は、明治・大正、昭和10年くらいまでをカバーして、富山を代表するオビニオンリーダーだったのではないのでしょうか。このようなジャーナリストはなかなかいません。幸いなことに、彼が出版した『江花叢書』の復刻版が新興出版社から出ています。そして、『ある新聞人の生涯 評伝井上江花』という一つの評伝がまとまっています。ただ、この評伝はジャーナリストとしての面に焦点が当てられていますので、我々が特に興味を持つ文学者や文学との関わりの中ではインパクトに欠けるかもしれません。彼の著作を繰っていくと、横山源之助や大井冷光と密接なことが分かります。特に、大井冷光は井上江花を追いかけたような文業を残しており、彼との関係は重い線です。

それから、『江花文集』というのがあります。これは、高岡市立図書館に1セットしか残っていないのではないかと思います。『江花叢書』に載らなかったその前のところを中心にして、全7巻あります。これは自費出版したもので、自分の親戚や親友らに配っただけの、おそらく100部も印刷されていない少部数のものです。高岡市立図書館に所蔵されている『江花文集』がなくなってしまうとどうしようもなくなります。

井上江花は近代の目から富山県って何だ、どんな特徴があるかを改めて見直した人物です。何しろ、黒部川や立山の探検をやったり、大境の洞窟の発見、さらには郷土史の発掘、社会問題への切り込みなど様々な試みをやった人です。富山県全体を近代の目で見直そうというのを徹底

した人です。

去年、桂書房の勝山敏一さんが『明治・行き当たりレンズ』という面白い本を出しました。これは井上江花の家に残っていた、多分井上江花が写したであろう写真を使い、江花が書いた連載記事に解説を付けたものです。一枚一枚が、井上江花が見た通りの富山が写っているのが興味深い。このように、井上江花のことに關しては、だんだん分かってきたことが多く、資料もかなりあります。

## 富山文学は中央の流れに關連

ここまで5人取り上げ、この程度のこと分かってきているという現状をお話しました。結局のところ私が言いたいのは、ようやく資料が整ってきて、富山の文学は研究しようとするればできる状況になってきたということです。ぜひ、資料に挙げた20人程のうち1人でもいいですから、ちよつと読み込んでみようかなと思っただけです。面白い人物が20人の中に必ずいるはずですから、ぜひ追っかけてみてほしいです。

近代文学研究を専門としていく人間にとって、富山文学の研究は決してマイナーではありません。地方文学の研究が中央文壇の流れや日本の文学そのものを考えるときに絶対にプラスになります。幅広い視点から近代文学を見ることで大事な気がします。積極的に富山文学を研究していただきたいと思います。

(2016年3月5日、於富山大学人間発達科学部)

# 「高志の国文学館周辺の文学散歩」

澤田隆彰

二〇一六年度の文学散歩として「高志の国文学館周辺の文学散歩」を実施しましたので、以下その概要を報告します。

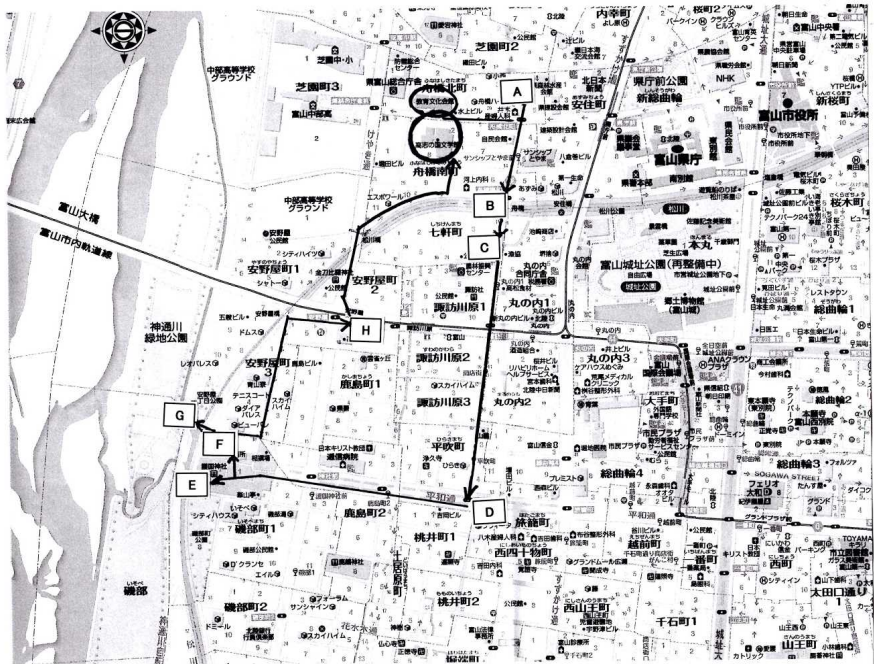
実施期日 二〇一六年一〇月二十二日（土）  
参加者 二十二名

まず、今回参加者が二十二名と多かったのは、澤田が講師を努める富山県生涯学習カレッジ自遊塾の講座「ふるさとの文学めぐり（入門編）Ⅴ」と共催のためであり、参加者内訳は富山文学の会会員八名、自遊塾塾生七名、一般参加七名（うち富山大学の小谷先生関係五名）でした。

午前一〇時、富山県教育文化会館三〇四号室に集合し、資料配布と簡単な説明、および今回の文学散歩途上（七軒町、丸の内周辺）には「鱒寿し」製造販売の店舗も多くあることから、文学散歩終了後三〇四号室にて「鱒寿し」の食べ比べを行うことも説明。参加者はこの食べ比べのほうにより関心があったかも。

文学散歩は、後記地図A（常夜燈）からH（中山輝旧宅）の順路で回るべく、午前一〇時三十分に出発しました。

各地点ゆかりの作家、文学作品等は、A B・船橋にまつわる話および小寺菊子『河原の対面』 C・名物は鱒寿し？ 鮎寿し？ D・小寺菊子『屋敷田圃』 E・護国神社の磯部富士、泉鏡花『蛇くひ』 F・翁久允 G・遠藤和子『佐々成政』 泉鏡花『黒百合』 C・中山輝旧宅および源氏鶏太 です。





## A 常夜燈（北側）・頼三樹三郎石碑

### ① 昔の神通川の流れ、川幅

富山在住の人なら、昔の神通川は大きく蛇行し高志の国文学館、県庁、市役所あたりを流れていて、現在の松川は旧神通川の一部であることはご存知かと思いますが、今でも旧神通川の川幅を実感できる場所があります。

それは、今も残る常夜燈です。北側（左岸）の常夜燈は富山県森林水産会館前のA地点に、南側（右岸）のそれはB地点（松川沿い）にあります。

この常夜燈は両方とも、ところどころ損傷しており、富山大空襲を受けたことが分かります。

### ② 頼三樹三郎石碑

北側常夜燈横に、頼三樹三郎の漢詩「神通川即吟」を刻んだ石碑があります。三樹三郎は頼山陽の三男で、嘉永元年（一八四八）越中を旅した時にこの七言絶句を作っています。

鉄鎖横江万丈長

鉄の鎖は大河に横たわり 万丈の長さだ

急流如矢響琅々

急流は矢のように早く 浪々と響き

五更鴉唱人蹤白

夜明けに鴉が啼き 人の足跡も白い

六十四梁舟板霜

六十四梁の舟板には 霜が降りている

なお、三樹三郎は幕末の尊王攘夷論者で、越中を訪れた十一年後、安政の大獄で捕らえられ斬首されました。安政六年（一八五九）一〇月のことで、三十四歳という若さでした。

ちなみに、県内では宇奈月の愛本橋の袂にも三樹三郎の

漢詩碑があります。

常夜燈（北側）



常夜燈（南側）



## B 常夜燈（南側）、船橋、および神通橋（木橋）

① 旧神通川により分断されていた町の南北を結んでいたのが神通川船橋で、江戸時代中期以降は六十四艘の舟を繋いでおり、その袂に常夜燈がありました。

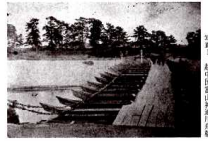
② 森林水産会館前に立っている北側の常夜燈は、もとは道を挟んでもう少し北寄りの場所にあり、南北筋違いに設置されていたといわれ、船橋の長さは約四三〇mもあったと伝えられています。

③ 神通川船橋は、江戸時代の紀行文『東遊記』にも「此

船橋と云ふ物、諸所にあれども、当所船橋日本第一也。」と記されており、さまざまな名所図絵や浮世絵版画に描かれ広く流布するようになり、日本一の船橋との評価が定着しました。



富山市第七博物館発行「特別展 街道を歩く 一近世富山町と北陸道」より



々とした静かな四邊の秋色を眺めてゐた。

とあります。

明治十二年（一八七九）、富山市旅籠町十二番地（D地点）で生まれた小寺菊子は、明治二十八年（一八九五）数え年十七で上京しますが、「船橋」と呼ばれていた橋はこ

④ 六十四艘の舟を繋いだ船橋も明治十五年に木橋に掛け替えられ、神通橋と称されました。

四

小寺菊子の自伝的小説『河原の對面』に  
 街端れの太川に長い長い橋が架つてゐた。昔は船をつないでその上に板を並べて、僅かに人を通してゐた、と云ふので、その橋は今でもやつぱり「船橋」と呼ばれてゐた。お町等はしばらくその橋の上に立つて、廣

の神通橋でした。

C 鱒の寿し？ 鮎の寿し？

① 富山市丸の内に、富山漁業共同組合（C地点）があります。

組合のパンフには「現在、事務所の置かれている所は、慶長年間から神通川の船橋の常夜燈の傍に位置し、藩政時代には鮎川役の番所が置かれた所と推測される。神通川漁民の歴史と伝統の中心地としての役割を四〇〇年に渡って受け持ってきた由緒ある場所である。」とあります。

② 今では富山の名物というところ「鱒寿し」ですが、江戸時代は「鮎寿し」のようでした。次の図は「鮎寿し」が名物だったことを示しています。

右は十返舎十九の『金草鞋』ですが、第十八編（越中立山紀行）には舟橋がめづらしいとの狂歌とともに、「川ぎしのちや屋 あゆのすし めいぶつなり」として「名物の鮎のすし」とて買う人の おしかけて来る茶屋のにぎはひ」という狂歌があります。

左は明治初年頃の舟橋の浮世絵版画ですが、橋詰の商店は名物の「鮎すし」を商っている様子が描かれています。



十返舎一九『金草鞋』より



富山浮世絵版画「越中之国富山船橋之真景」（明治初年頃の神通川船橋）

### D 小寺菊子生家跡地

① 小寺菊子は、田村俊子、岡田八千代とともに「大正の三閩秀」と呼ばれ活躍していたもののいつしか埋もれ忘れられていました。この小寺菊子を掘り起こしたのは、富山大学教授だった金子幸代氏です。二〇一四年二月、金子幸代編集・解説「小寺菊子作品集」（桂書房）が刊行されています。

② 小寺菊子の『屋敷田圃』に「鏡花さんがずつと昔、私の家の斜向ふにあつた私の友達の家へ英語を教へて、然かられたとか、残念ながら泉鏡花が家庭教師に来ていた家は分かりませんでした。

### 小寺菊子生家跡付近



### 磯部富士



### E 磯部富士（護国神社内）

① 磯部富士を知らない方が以外に多いので翁久允宅へ行く前に護国神社に寄りました。

富山藩二代藩主前田正甫により磯部の地に琵琶湖、近江八景などを模した磯部遊園が造営されます。しかし正甫の死後遊園は荒廃し僅かに磯部富士と呼ばれる土盛りの富士山の跡を残すのみで、この磯部富士も昭和三十二年（一九五七）撤去されますが、記念に石を組んだ現在の「磯部富士」が造られました。

### F 翁久允宅と早百合観音祠堂

① 護国神社の駐車場を抜けて左折するとすぐに翁久允宅前です。  
翁久允は一九〇七年渡米し邦字紙などに小説発表、一九二四年帰国後『週間朝日』編集長など務め一九三六年富山で郷土文化誌「高志人」を創刊しました。

## 葉言の號刊創

『高志人』の辭を書いた約三ヶ月の後に、高志人創刊號を世に於けることの出発点は、全く弘聖院の直轄開校なる御援助の賜物であります。この赤ん坊が、どう育つてゆくか、これは全く、豫測出来ないものであるが、擬心は天折しないやうに、長程を保つやうに、さうして出世の目的と本願を果たすやうに、親心に似た祈りをもつて、おくり出すこととあります。

史上に現はれた赤ん坊は千年か千何百年か前のことではないか、何百年何千何万年か測りきれない太古から、結中そのものは存在してゐたし、私達の今日思ひやもない現象や生活がくり返されて来たこととらうし、今日の結中人たるわれわれもまた自然な本能から能くもたかり取り込まれた諸現象と異なるのではないのである。が、その必然性たる諸現象も、任前に注意深く観察したら、ある一定の法則をもつて無始から永遠に動いてゐるのである。人間の作つた文字や言葉も超越して、事實は事實として存在し流轉してゆくのだ。そして私達は今まで渾身のその文字や言葉の體系に依つて私達祖先の生活を理解して来たのである。が、その理解は余りにも断片的であり、断片的であり、余りに人間的であつた。

赤ん坊が、これからどんな途程分を吸収して、どんな發育を遂げてゆくか全く不明だが、この郷土の血と骨に關れる爲めに、扱められた、埋もれた過去の歴史の扉を開いた。それと誰れも知らないで、思はずしるの思はずしる使命を果たすことが幾分でも出来た、その誰れも知らない者が連なれるのである。

結中人はこの赤ん坊の誕生を祝願し、そして終末の輝きを齎して下さることを祈ります。

翁久允

② 翁久允は自宅敷地内に早百合観音祠堂を建立します。早百合観音祠堂の案内板には次のように書かれています。

「この祠堂は、早百合伝説の一本榎のそばに住んだ作家でジャーナリストであつた翁久允（一八八八〜一九七三）の手により昭和二十九年（一九五四）建立されたものである。

早百合は五福村の農家の娘で、織田信長の武将佐々成政が富山に入城した折、召し出された娘のひとりという。成政は心根の優しい早百合を、ことのほか寵愛したので他の女性たちから嫉視されていた。

天正十二年（一五八四）成政が厳冬立山の

ざらざら越えを敢行、浜松城の徳川家康に豊臣秀吉との対決を促したが同意を得られず空しく帰城した。そこに早百合不義のうわさを聞き怒り狂つたという。彼女は無実無罪と訴えたが聞き入れられず、磯部堤の一本榎に吊るされ斬られた。いわれのない罪に彼女は一立山のざら峠に黒百合の花が咲くときあなたを滅ぼしましょう」という呪いの言葉を残して果てたという。黒百合伝説が今も語り伝えられている。

この伝説は、後に越中を支配した前田氏が治国の策として成政を暴君に仕立てるために作られたともいわれているが、江戸時代には限りなく哀れな郷土の物語として民衆の間にひろまつていった。今は、彼女が惨殺された一本榎のあつた場所に「磯部さくら」の碑が建てられ、富山市五福の長光寺には彼女の墓が残っているだけである。

この祠堂の建立は、早百合の成仏を願ひ、また昭和二十年（一九四五）八月の富山大空襲の際に神通川原で無残な死を遂げた多くの人々の霊を供養するため発願されたものである。

平成十六年三月 富山市

### G 磯部堤

① 翁久允宅横の磯部堤に登ると「磯部のさくら」石碑と「磯部の一本榎」案内板があります。案内板は昭和十五年設置で書いてある内容は「早百合観音祠堂」とほとんど変わりません。

② 成政の早百合惨殺は、江戸時代の奇談集『三州奇談』や読本『繪本太閤記』に「柳の木の下で」として書かれています。

ますが、泉鏡花が『蛇くひ』（明治三十一年発表）で「磯部の一本榎」を取り上げ、翌年発表の『黒百合』で「榎の枝に懸けて愛妾早百合惨殺」と書いたことから、「磯部の一本榎の下で」となり、その後明治四十二年（一九〇九）刊行の富山市史も「神通河畔磯部堤一本榎ノ下ニ於テ鮎鯉斬トナシ、親族十余人ヲ殺ス」と記載したこと等もあり今に続く「磯部一本榎伝承」となったと思われます。



## H 中山輝旧宅

- ① 磯部堤を降りて左折し、市内電車が通る道路で右に曲がる。すぐ中山輝旧宅前です。参加者の荒川さんは小学生の時同級生に中山輝のお子さんが出たとのことでした。
- ② 中山輝は、源氏鶏太（本名・田中富雄）の詩の師匠であり、富山商業学校に通っていた頃、田中富雄は学校の帰り中山宅に寄り道していたそうです。
- ③ 昨年の文学散歩で近藤周吾先生に「源氏慶太の通学路」として案内してもらったので、富山文学の会『群峰2』も参照して下さい。

### 鱒寿しの食べ比べ

- ① 文学散歩も無事終了し、十二時過ぎに富山県教育文化会館に到着。このあと皆さん期待の「鱒寿しの食べ比べ」です。

- ② 当日配布の参考資料より。

- 一 「鱒寿し」について

鱒寿しとは 鱒（サクラマス）をもちいて発酵させずに酢で味付けした押し寿し（早ずし）の一種。

表記は必ずしも一定せず、ます寿し、ますの寿し、鱒の寿し、などある。

- 二 鱒寿しの歴史

現在の鱒寿しの起源として語られているのは享保年間に富山藩第三代藩主・前田利興の家臣吉村新八が將軍徳川吉宗に献上し絶賛を受けたのが始まりとの逸話がある。

但し『越中資料』第2巻には、吉村新八が献上したのは「鮎寿司」でありその製法が現在の鱒寿しと同

じ「早ずし」であったと記載されている。  
 なお、平安時代中期の『延喜式』には鮭寿司が貢献物として登場するが、これは米飯を発酵させた「なれずし」とされる。

また、富山市にある鵜坂神社に神通川で採れた一番鱒を塩漬けにして春の祭礼に供えていたものが江戸時代に現在の早ずしの形態をとる鱒寿司に変化していったとの説もある。

### 三

「富山ます寿司協同組合」加盟店

青山総本舗 今井商店 川上鱒寿司店 元祖せきの屋  
 元祖関野屋 小林鱒寿司店 鱒寿司本舗高田屋  
 高芳 千歳 なかの屋 なみき鱒寿司店 前留 吉田屋 鱒寿司本舗

上記以外の鱒寿司店

富山市 味の笹義 大多屋 扇一 すし幸 寿司一  
 順風屋(魚廣) 寿々屋 昔亭 竹勘 紀雅  
 丸高寿し まつ川 源

富山市以外

(宇奈月) 有磯きときと庵 やま茂 ます寿司屋ヒ

口助

(黒部市) 植万 (魚津市) 魚づ鱒寿司店

(入善町) 味の匠味 (立山町) 大辻

(滑川市) とと屋 (射水市) いそまき 笹寿司

(射水市) 丸龍庵

(高岡市) ニューオータニ高岡フード 味の山正

(氷見市) 若廣

(小矢部市) おやべ 平ら寿司本舗

(\*) お問い合わせ：上記以外の鱒寿司店をご存知の方は澤田まで教えて下さい。

当日味比べした鱒寿司は、せきの屋、関野屋、高田屋、前留、まつ川、吉田屋 でした。

感想は各自それぞれということで・・・  
 なお、当日配布の資料はA3判十一枚、A4判三枚ですが、ここにはその一部しか掲載しておりません。  
 また、つたない澤田の説明に適宜補足説明をして頂いた野村様、ならびに参加者各位に感謝いたします。



いよいよ味比べです。





## 編集後記

▼群峰3をお届けいたします。今号は研究論文五編に昨年の第7回研究大会における八木光昭先生の講演抄録、文学散歩報告を加えた内容になりました。特に八木先生のご講演では、これまでの成果を踏まえて、今後の研究展望について示唆を頂きました。

▼当会では、今年の第8回研究大会を機にWebページの開設を予定しております。二ヶ月に一度の研究例会、読書会、文学散歩、研究大会の情報や、これまでの研究成果などを閲覧していただくことができるようになります。あわせてご活用願えればと考えています。

高熊記

群峰 第3号

二〇一七年三月四日 発行

編集・発行 富山文学の会  
連絡先 富山市本郷町13

富山高等専門学校（本郷キャンパス）

高熊教員室

富山市太郎丸西町2丁目6・11

製本

第一共同印刷